岐阜県文化財保護センター
調査報告書　第147集

栗 原 九 十 九 坊 跡

２０２０
岐阜県文化財保護センター

栗原九十九坊跡（くりはらくじゅうくぼうあと）

2020

岐阜県文化財保護センター

序

不破郡垂井町は濃尾平野の北西部に位置し、北西部の池田山塊や南西部の南宮山塊に囲まれた地形の特徴から、古来より東西交通の要衝とされてきた地域です。特に古代においては、西から不破関（関ケ原町）、美濃国府（垂井町）、美濃国分尼寺（垂井町）、美濃国分寺（大垣市）と連なるこの一帯は、古代を通じて重要な地域であったと言えます。

このたび、西濃農林事務所による公共治山事業治山施設機能強化事業に伴い、不破郡垂井町栗原において、栗原九十九坊跡の発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査では、大型の土坑や東西に走る溝状遺構を確認しました。また、古代から近世にかけての遺物が出土しました。さらに、地形測量から山頂付近から山麓に広がる大規模な寺院跡であることも明らかになりました。これらのことから、栗原山の東側一帯に古代から近世にかけて寺院が展開していたと思われます。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史的研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、垂井町教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

令和２年３月

岐阜県文化財保護センター
所長　小林　法良

例　言

1　本書は、岐阜県不破郡垂井町栗原に所在する栗原九十九坊跡（岐阜県遺跡番号 21361-2065）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、公共治山事業治山施設機能強化事業に伴うもので、岐阜県西濃農林事務所から岐阜県教育委員会が依頼を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　菱田哲郎京都府立大学教授の指導のもとに、発掘作業は平成 30 年度に、整理等作業は令和元年度に実施した。

4　発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆及び編集は加中雅章が行った。

6　発掘作業における現場管理、掘削、測量などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社ユニオンに委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、橋本技術株式会社に委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

岡本直久、金子健一、藤澤良祐、渡邉博人、垂井町教育委員会

9　本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。

10　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

11　調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　次

序
例言
第１章　調査の経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……3
第２章　遺跡の環境……6
　第１節　地理的環境……6
　第２節　歴史的環境……7
第３章　調査の成果……11
　第１節　基本層序……11
　第２節　遺構・遺物の概要……12
　第３節　遺構と遺物……14
　　遺構一覧表、遺物観察表、発掘区全域図　分割図
第４章　総括……30
　第１節　栗原九十九坊の沿革……30
　第２節　測量調査の成果からみた栗原九十九坊跡の構造……33
　引用・参考文献……44
写真図版
報告書抄録

挿図目次

図１　栗原九十九坊跡位置図 ･････････････････････ 1
図２　試掘・確認調査坑、本発掘調査範囲 ･････････ 2
図３　グリッド設定図 ･････････････････････････ 5
図４　遺跡周辺の地形分類図 ･･････････････････････ 6
図５　周辺遺跡位置図 ･････････････････････････ 10
図６　基本層序 ･･････････････････････････････ 11
図７　SD１遺構図、出土遺物実測図 ･･････････････ 17
図８　SK４・６・12・16・19・27・31 遺構図、SK４・16・31 出土遺物実測図･････････････････････ 18
図９　SK32・45・72・77 遺構図、SK32・45 出土遺物実測図 ･････････････････････････････････ 19
図 10　攪乱坑及び表土出土遺物実測図･･････････････ 20
図 11　発掘区全域図割付図･･････････････････････ 24
図 12　発掘区全域図分割図（１）･････････････････ 25
図 13　発掘区全域図分割図（２）･････････････････ 26
図 14　発掘区全域図分割図（３）･････････････････ 27
図 15　発掘区全域図分割図（４）･････････････････ 28
図 16　発掘区全域図分割図（５）･････････････････ 29
図 17　発掘区全域図分割図（６）･････････････････ 29
図 18　栗原九十九坊跡　地形観察図（全体）･････････ 39
図 19　栗原九十九坊跡　地形観察図（Ａ区）･････････ 40
図 20　栗原九十九坊跡　地形観察図（Ｂ区）･････････ 41
図 21　栗原九十九坊跡　地形観察図（Ｃ区）･････････ 42
図 22　発掘区周辺地形測量図･･････････････････････ 43

表目次

表　１　試掘・確認調査結果･･････････････････････ 2
表　２　周辺遺跡一覧表･････････････････････････ 9
表　３　遺構一覧表･････････････････････････････ 12
表　４　出土遺物一覧表･････････････････････････ 13
表　５　溝状遺構一覧表･････････････････････････ 21
表　６　土坑一覧表（１）･････････････････････････ 21
表　７　土坑一覧表（２）･････････････････････････ 22
表　８　土器類観察表･･･････････････････････････ 23
表　９　金属製品観察表･････････････････････････ 23
表　10　石製品観察表･･･････････････････････････ 23

挿入写真目次

写真 １　調査着手前　発掘区上段（北西から）･････････ 4
写真 ２　調査着手前　発掘区下段（西から）･･････････ 4
写真 ３　石塔集積場所･･････････････････････････ 36
写真 ４　平坦面（A③）･････････････････････････ 36
写真 ５　平坦面（A⑤）･････････････････････････ 36
写真 ６　窟入口付近･････････････････････････････ 36
写真 ７　平坦面（A⑥）･････････････････････････ 37
写真 ８　平坦面（A⑨）･････････････････････････ 37
写真 ９　栗原山中世墓群･････････････････････････ 37
写真 10　土塁区画（A⑪）･･････････････････････ 37
写真 11　御嶽神社･･･････････････････････････････ 37
写真 12　平坦面（B①）･････････････････････････ 37
写真 13　参道（B②）･･･････････････････････････ 37
写真 14　丸山神社･･･････････････････････････････ 37
写真 15　瓦散乱場所･････････････････････････････ 38
写真 16　五輪塔・石仏（B⑧）･･･････････････････ 38
写真 17　清水寺跡･･･････････････････････････････ 38
写真 18　石組（C②）･･･････････････････････････ 38
写真 19　溝（C④）･････････････････････････････ 38
写真 20　参道（C⑥）･･･････････････････････････ 38
写真 21　平坦面（C⑦）･････････････････････････ 38
写真 22　リショウジ跡･･･････････････････････････ 38

写真図版目次

図版 １　発掘区近景（1）
図版 ２　発掘区近景（2）
図版 ３　遺構
図版 ４　出土遺物

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

栗原九十九坊跡は、不破郡垂井町栗原及び養老郡養老町別所地内に所在する（図１）。今回の発掘区は、栗原山の山麓部分付近に位置する。

当遺跡内において、治山施設機能の強化を目的とし公共治山工事が実施されることになった。この事業に伴い、平成29年８月に垂井町教育委員会が試掘調査を行い、寺院跡と考えられる遺構を確認した。遺跡の試掘・確認調査は、岐阜県西濃農林事務所の依頼により平成29年９月に岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課（以下、県文化伝承課）が実施した。試掘調査坑は、事業予定地内及びその周辺に７箇所（TP１～TP７）設定された（図２：試掘調査坑番号は試掘・確認調査時の名称を記載した）。

試掘・確認調査を実施した結果、TP１・２・４において遺構を検出した。TP１において検出した土塁及び溝状遺構は、平成29年８月に垂井町教育委員会が実施した試掘調査と同様の状況であることを確認した。また、TP２・４・６・７から遺物が出土した（表１）。試掘・確認調査の結果をもとに、県文化伝承課は、平成29年12月21日に平成29年度第３回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会を開催し、開発事業に対する遺跡の取扱いについて検討し、442㎡の本発掘調査が必要との意見をまとめた。

本工事については、文化財保護法第94条第１項の規定に基づき、西濃農林事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下「県教育長」という。）あて埋蔵文化財発掘通知（平成30年３月30日付け西農林第1949号）が提出され、同条第４項の規定に基づき、県教育長から同事務所長あて発掘調査実施の勧告（同年４月10日付け文伝第84号の５）をした。同事務所長は発掘調査の実施を県教育長に依頼し、岐阜県文化財保護センター（以下「当センター」という。）が実施した。当センターは調査着手後、発掘調査の報告（平成30年７月６日付け文財セ第160号）を県教育長に提出した。

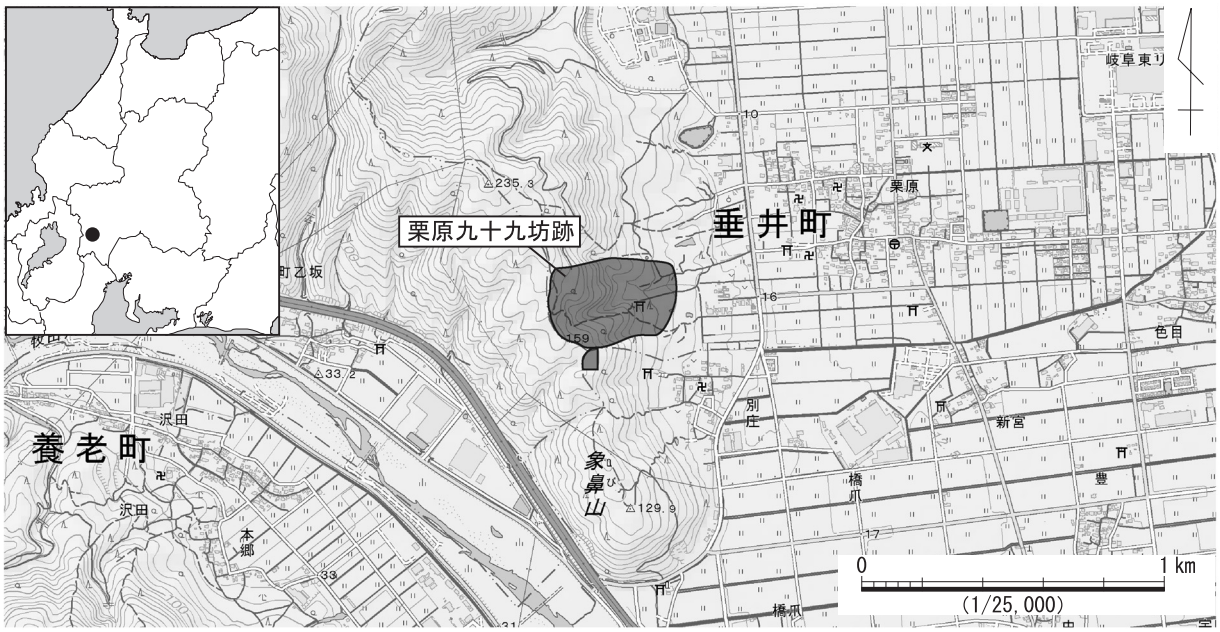


図１　栗原九十九坊跡位置図（S=1/25,000）

（平成30年度国土地理院発行の2万5千分の1電子地形図『大垣』『養老』を使用したものである）

表１　試掘・確認調査結果

調査坑	検出遺構（基数）	出土遺物点数					合計
		土師器	灰釉陶器	中近世陶器	石製品	金属製品	
TP1	溝（１）　土塁（１）	0	0	0	0	0	0
TP2	土坑（２）	6	2	1	1	0	10
TP3	なし	0	0	0	0	0	0
TP4	溝（１）	0	1	2	0	1	4
TP5	なし	0	0	0	0	0	0
TP6	なし	0	0	1	0	0	1
TP7	なし	1	0	2	0	0	3

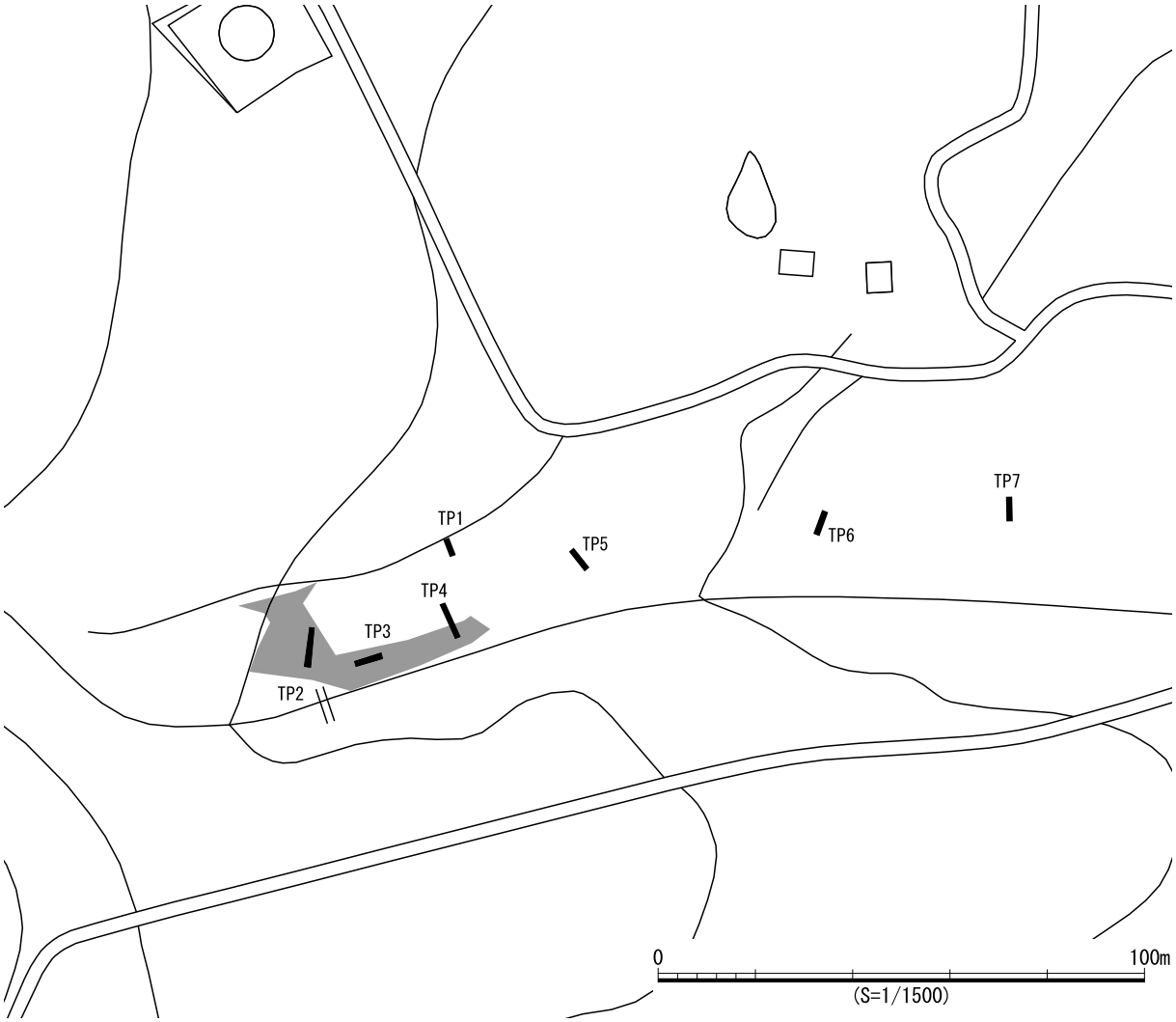


図２　試掘・確認調査坑、本発掘調査範囲（網掛け範囲：発掘区）

第２節　調査の方法と経過

１　調査の方法

発掘作業は、平成 30 年度に 442 ㎡を実施した。世界測地系座標をもとに５ｍ×５ｍの小区画を設定し、北から南へＡからＦ、西から東へ１から 11 とした（図３）。そのため、発掘区の北隅のグリッドはＡ４、西隅のグリッドはＢ１となる。発掘区内には遺物包含層が存在せず、表土（Ⅰ層）を除去した後、Ⅰ層基底面において遺構を検出し、遺構掘削作業を実施した。表土掘削、遺構検出、遺構掘削はスコップ・草削り鎌・移植ゴテなどを用いて人力で行った。遺構は、土層堆積状況を観察し、必要な記録を作成した後に完掘した。

原則として遺構には検出順に番号を付し、「S001」というようにＳと３桁の数字により表記した。この番号は、整理等作業時に遺構種別ごとに遺構種別番号を付けたが、今後の資料活用時に支障を来さぬよう、本書の遺構一覧表（表５～７）に記載した。遺構等の実測作業は、原則として平面図はデジタル測量、土層断面図は手測り測量にて、それぞれ実施した。図面の縮尺は、50 分の１を基本として、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。表土から出土した遺物は、層位・グリッド単位、遺構から出土した遺物は、遺構内を概ね５cm 単位の人工層位、若しくは分層した層位毎に取り上げたが、遺構との関係性が検討できる出土状況については、出土位置を測定して取り上げた。遺物には、取り上げ単位ごとに遺物ラベルを添付した。遺物ラベルには「西暦下二桁とＫＫ（遺跡名略号)」「出土場所（遺構番号又はグリッド番号)」「出土層位」「取上日」「備考」を記入し、この記録をもとに遺物台帳を作成した。写真撮影では、35mm フィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、６×4.5cm 判フィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラを使用した。発掘区全体の景観写真撮影は、脚立を使用し撮影した。排土は、発掘区周辺に土嚢に入れて仮置きし、調査終了後に人力で埋め戻しを行った。

２　調査の経過

現地での調査経過は、以下のとおりである。

第１週（７／２～６）発掘区上段平坦部（Ａ３～４、Ｂ１～４グリッド）の表土掘削を開始。降雨により３日間作業中止（７／４～６）。

第２週（７／９～７／13）発掘区下段西部（Ｃ２～４、Ｄ１～４、Ｅ１～４グリッド）の表土掘削を開始。発掘区下段西部の遺構検出作業、遺構掘削作業。

第３週（７／16～７／20）発掘区下段中央部（Ｃ５、Ｄ５～７、Ｅ５～７）の表土掘削を開始。

第４週（７／23～７／27）発掘区下段中央部の遺構検出作業、遺構掘削作業。SK32を検出。SK45から古銭出土。

第５週（７／30～８／３）菱田哲郎氏（京都府立大学教授）の指導（７／30）。発掘区下段東部（Ｂ11、Ｃ８～11、Ｄ８～10、Ｅ８グリッド）の表土掘削を開始。発掘区下段中央部の景観写真撮影（８／２）。

第６週（８／６～８／10）発掘区上段平坦部・発掘区下段東部の遺構検出作業、遺構掘削作業。発掘区下段東部の景観写真撮影（８／10）。SK32・SD１を完掘。

第７週（８／13～８／17）夏期休暇のため、現場作業休止（８／13～20）。
第８週（８／20～８／24）発掘区下段西部の景観写真撮影（８／23）。
第９週（８／27～８／31）発掘区上段平坦部の景観写真撮影（８／27）。全調査を終了（８／29）。
　　発掘区埋め戻し作業開始（８／29）。
第10週（９／３～９／７）発掘区埋め戻し作業継続。
第11週（９／10）発掘区埋め戻し作業終了。
第12週（９／19）現地引渡し。

出土遺物の洗浄・注記等の一次整理作業は、平成30年９月４日から９月７日までの期間に、遺物実測や挿図作成等の整理等作業は令和元年度に、それぞれ当センターにて実施した。整理等作業時には、令和元年９月10日に菱田哲郎氏（京都府立大学教授）に総括に関する指導を受けた。

なお、出土金属製品の保存処理を令和元年度に実施した。

３　調査体制

発掘作業及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	野村幹也（平成 30 年度）、小林法良（令和元年度）
総務課長	加藤武裕（平成 30～令和元年度）
調査課長	春日井恒（平成 30～令和元年度）
調査担当係長	山本厚美（平成 30 年度）、鷲見博史（令和元年度）
担当調査職員	加中雅章（平成 30～令和元年度）

写真１　調査着手前　発掘区上段（北西から）

写真２　調査着手前　発掘区下段（西から）

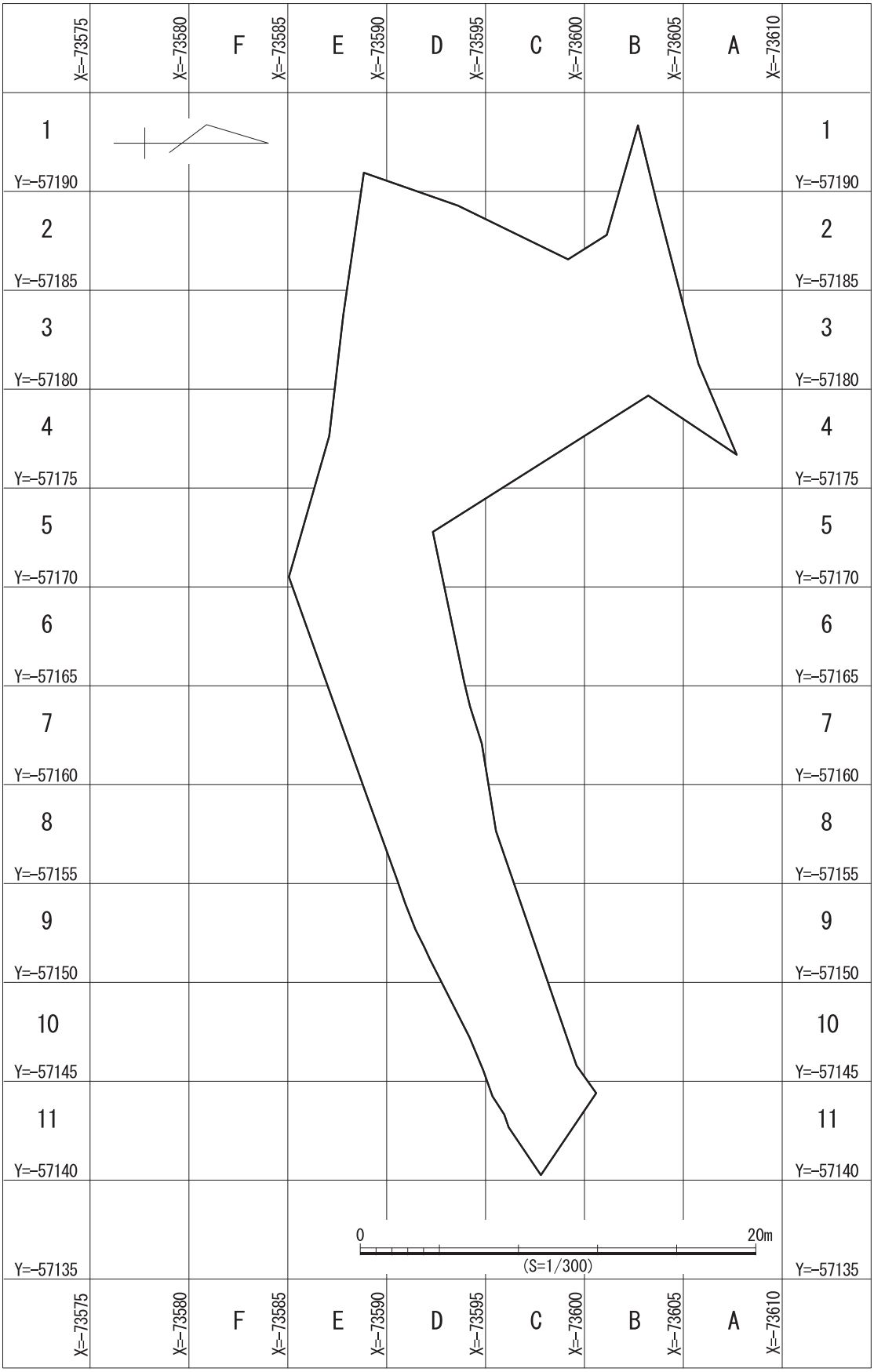

X=-73575
X=-73580
F
X=-73585
E
X=-73590
D
X=-73595
C
X=-73600
B
X=-73605
A
X=-73610
1
Y=-57190
2
Y=-57185
3
Y=-57180
4
Y=-57175
5
Y=-57170
6
Y=-57165
7
Y=-57160
8
Y=-57155
9
Y=-57150
10
Y=-57145
11
Y=-57140
Y=-57135
0
20m
(S=1/300)

図３　グリッド設定図

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

当遺跡が所在する垂井町及び養老町は濃尾平野の北西部に位置する。この位置は、伊勢湾が北に入り込み、敦賀湾が南に入り込んだ地峡部にあたり、北に伊吹山系・南に鈴鹿山系と山に囲まれている。古くから東西の交通路が集中する交通の要衝であり、古代では東山道、近世では中山道、美濃路、現代では、ＪＲ東海道本線、東海道新幹線、国道 21 号、名神高速道路などが走っている。垂井町の北部から北西部にかけては池田山塊が東西に連なり、揖斐郡揖斐川町、池田町、不破郡関ケ原町との境になり、南西部には南宮山・栗原山がある南宮山塊が北西から南東に横たわり、大垣市上石津町との境をなしている（図４）。これらの山地はいずれも壮年期の山地地形であり、急峻な山と深い谷からなっている。養老町の西部は断層によってできた養老山地が南北に連なっている。養老町の象鼻山に墳墓が造られた弥生時代から古墳時代にかけて養老町付近まで旧伊勢湾が入り込んでいたと推定される。

垂井町の中央部から東部・南東部にかけては、相川とその支流河川により更新世から完新世にかけて形成された扇状地となっている。養老町の東部は上石津町方面から流れる牧田川が揖斐川へとつながり、山地から多量の土砂を流出し、沖積作用でできた平地となっている。また、岐阜県西濃地方から三重県北勢地方にかけては乏水地となっているため、「マンボ」と呼ばれる灌漑用地下水路や溜池がつくられている。栗原の山麓には清水寺溜池、中溜池がある。扇状地の扇端部では伏流水が「ガマ」と呼ばれる湧水となり各所から湧き出している。

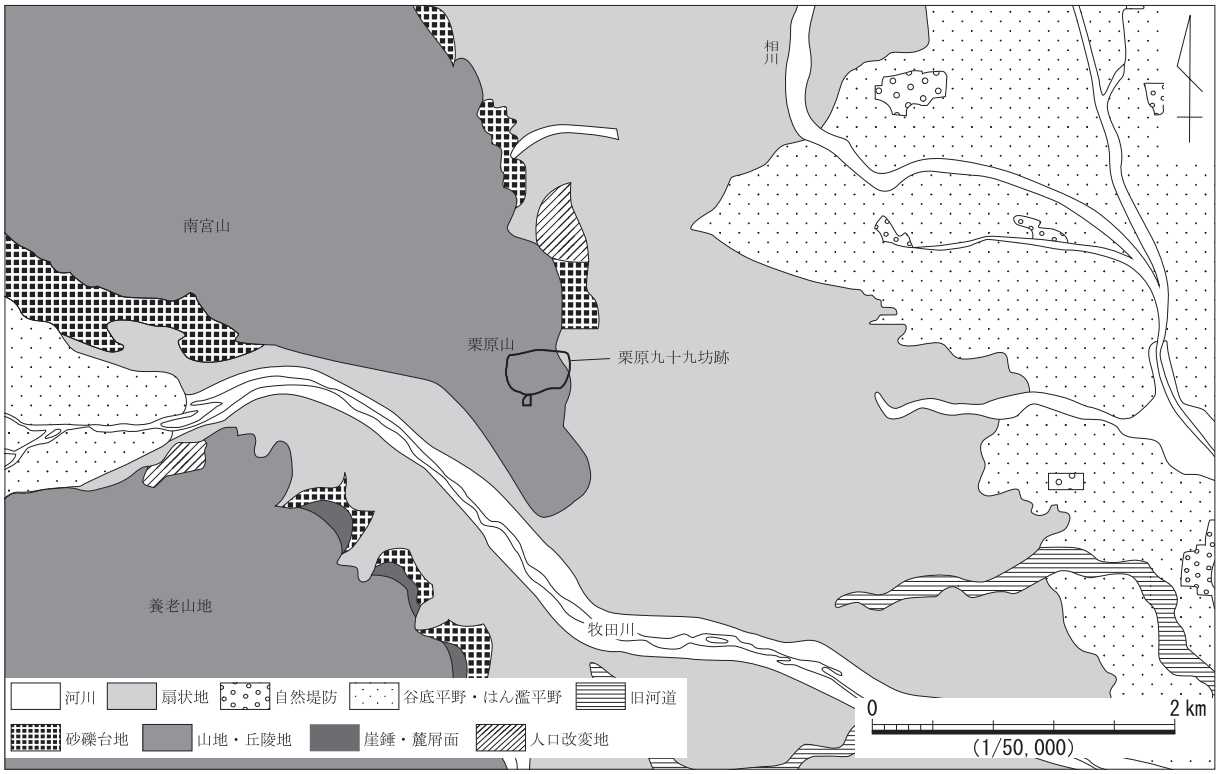


図４　遺跡周辺の地形分類図（S=1/50,000）

（岐阜県企画部1983『岐阜県土地分類基本調査　大垣』　1986『岐阜県土地分類基本調査　彦根東部・津島・桑名』（1/50,000）を基に作成）

第２節　歴史的環境

当遺跡周辺では、縄文時代から近世の遺跡が分布している。本節では各時期の主要な遺跡について、概要を時代順に記す[1)]。なお、本文中の括弧内の番号は、表２、図５と一致する。

旧石器時代　象鼻山古墳群（40）では、象鼻山の山頂部で後期旧石器時代のナイフ形石器や掻器等が出土している。

縄文時代　当遺跡周辺では、縄文時代中期以降の遺跡が知られている。南森下遺跡（９）では、縄文土器や石鏃、小黒見遺跡（12）では石皿、磨石、敲石などが採集されている。

弥生時代　日吉遺跡（51）は、象鼻山古墳群を造営した集団の集落と考えられている遺跡である。平成 19～20 年度に養老町教育委員会が発掘調査を実施し、弥生時代後期の環壕、竪穴建物などが検出された。栗原天待遺跡（39）に接している栗原山麓遺跡（38）や境野遺跡（18）では、弥生土器、須恵器等が採集されている。

古墳時代　当遺跡周辺の垂井町南部の独立丘陵である南宮山では、古墳の分布密度が高い。南山古墳群（15）は５基の古墳で構成される。そのうち、南山５号古墳(21)は一辺 48m、高さ 6.5mの方墳であり、円筒埴輪片が出土している。南山古墳群の東側に立地する境野古墳群（16）は、平成 24～28 年度に垂井町教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査（以下「垂井町分布調査」という。）において須恵器が採集されている。栗原古墳群（22）は６基の古墳で構成されるが、２号墳は周壕と葺石が確認できる全長約 44mの前方後円墳で、垂井町分布調査では埴輪、須恵器等が確認されている。象鼻山古墳群は南宮山の一支脈の南東端にあたる象鼻山に立地している。双鳳紋鏡や琴柱形石製品、玉・鉄剣、鉄刀、朱入りの壺が出土した岐阜県最古級の全長 40.1mの前方後方墳である象鼻山１号古墳(46)の他、上円下方壇、方墳、円墳の 70 基あまりの墳墓群で構成されており、弥生時代後期から古墳時代前期に大規模に造成し、計画的に古墳がつくられている。竜泉寺古墳（54）は、横穴式石室が開口していたと伝えられているが、石材採取により埋葬施設が破壊されている。その他の古墳として、葺石を備えた直径 18mの円墳である清御子古墳（24）、14 基の円墳で構成される八幡神社古墳群（20）などがある。また、杉ノ本古墳群（４）、谷の舞古墳（13）、大平古墳群（19）などのように半壊若しくは滅失した古墳もある。室原遺跡（26）、沢田遺跡（27）では、須恵器、灰釉陶器、中世陶器等が採集されている。

飛鳥時代　壬申の乱（672 年）を契機に美濃地域には諸豪族の寺院が造営される。遺跡周辺には県内において最も古い時期に創建された寺院が分布している。宮代廃寺跡（５）は、白鳳期に創建されたと推定される寺院跡である。昭和 42 年、47 年の発掘調査で瓦積みの塔基壇や築地跡が検出された。寺域は 150m四方に広がるといわれ、現在でも巨大な花崗岩でできた塔心礎が地上に露出している。単弁蓮華文や複弁蓮華文の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦など白鳳期から平安時代にかけての瓦、「開元通宝」（中国の銅銭）が出土している。壬申の乱で功績のあった大領宮勝木実の氏寺の可能性や、聖武天皇の美濃行幸の時の「宮処寺」にあてる説がある。

古代～中世　奈良時代以降、不破郡垂井町に美濃国府、不破郡関ケ原町に不破関が置かれ、大垣市に美濃国分寺、不破郡垂井町に美濃国分尼寺が造られた。そのため西濃地域は、古代美濃国の政治的中

心地となった。薬師堂跡（３）は延暦 12（792）年開基と伝えられ、江戸時代まで南宮神社の薬師堂があった場所である。日吉西遺跡（49）は日吉遺跡の西側に位置する。平成 14～18 年度に養老町教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査では、古墳時代から古代の須恵器や中近世陶器が採集された他、石仏や石塔が多く確認されている。南宮山から栗原山に連続する養老町の象鼻山一帯は、江戸時代の記録に「象尾山別所寺四十九坊」とあることから栗原山から象鼻山一帯に「九十九坊」「四十九坊」という寺院群があった可能性がある。栗原九十九坊跡（１）は、南宮山から南東に延びる支脈の根本に位置する遺跡で栗原山の中腹及び山麓に立地する。垂井町分布調査で灰釉陶器、常滑の甕や東山麓の広い範囲で人工的な削平地が多く確認されている。栗原九十九坊跡に関係する寺院として鎌倉時代の始めには「久保寺双寺」があったとされ、その他にも栗棘庵跡（36）、今回の調査地点に近接している清水寺跡（37）がある。清水寺は、愛知県知多市の八社神社に清水寺の梵鐘が所蔵されており、その銘から 1247 年以前には創建されていたと思われる。石造仏等が多く出土したとされる栗原山中世墳墓群（34）からは、蔵骨器と思われる古瀬戸や常滑の甕が確認され、石組が残されていたともいわれている。これらのことから栗原九十九坊跡は、山頂から山麓に広がる大規模な寺院群であった可能性がある。竜泉寺廃寺跡（53）は、多芸七坊の１つに数えられた寺院跡であり、当初法相宗であったが、後に天台宗に改宗したとされている。文化年間の記録に「天平宝字（757～765 年）に建立、其後三百年を過ぎて破滅す」とある。坊数は 48 坊あり、大正時代に当遺跡の周辺の谷から石仏 108 体を集め、現在の安養院内の地蔵堂に祭ったがその中の１体に大永４（1524）年と刻まれていたといわれており、礎石や石仏、五輪石なども発見されている。南宮山頂経塚群（８）では、山頂付近一帯に石組が確認でき、自然石に「如法経」と彫られた石塔が現存し、経甕、古瀬戸の片口鉢の蓋、銅製の経筒が出土している。薬師堂遺跡（２）は南宮山の山腹に位置し、垂井町分布調査では山茶碗、古瀬戸、常滑甕等を確認している。また、栗原山の山頂付近には関ヶ原の戦いの際に長宗我部盛親の陣が敷かれた栗原城跡（35）となっており、堀切や土塁と思われる遺構も確認されている。毛利秀元陣跡（14）は、関ヶ原の戦いの際、西軍の毛利秀元が陣を置いたとされている。その他の城館跡として、土岐氏の子孫の大野氏の居城として紹介されている宇田城跡（50）、丸毛兵庫頭や丸家三郎兵衛兼頼などが城主とされている大墳城跡（55）がある。

近世　南宮山山頂付近に位置する観音堂跡（６）は、建物礎石や石垣等が確認されており、垂井町分布調査で近世の瓦や陶磁器が確認されている。また、観音堂跡の南方に位置する千手堂跡（７）では、石柱や堂宇跡と思われる削平地が確認されている。表佐湊跡（25）は、豊臣秀吉による方広寺の大仏殿の建立、伏見城築城の際の木曽材を輸送する際の中継地として存在したと考えられている。当時、木曽材の京への輸送は、木曽川を下って犬山を中継地とした後、表佐湊跡で陸揚げされ、琵琶湖の朝妻湊から再び舟運を利用したとされている。

注

１）各遺跡の記述は、以下の文献を参考とした。

岐阜県教育委員会1970『岐阜県指定文化財調査報告書』第13巻

岐阜県教育委員会・垂井町教育委員会1973『宮代廃寺跡発掘調査報告』

岐阜県地方改良協会養老郡支会1925『養老郡志』

佐藤和夫2014『垂井の文化財第38集』（回想　南宮大社経塚遺物の出土経過）、垂井町文化財保護協会

垂井町史編纂委員会1969『垂井町史』（通史編）

垂井町1996『新修垂井町史』（通史編）

垂井町教育委員会2017『垂井町遺跡詳細分布調査報告書(1)』

平塚正雄1932『美濃明細記』

安福彦七1976『栗原山九十九坊象鼻山別所寺の歴史を尋ねて』

養老町1978『養老町史』（通史編上巻）

養老町教育委員会1984『のびゆく養老町』

養老町教育委員会2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』（養老町埋蔵文化財調査報告書第４集）

養老町教育委員会2010『象鼻山古墳群発掘調査報告書』（第１～４次発掘調査の成果　養老町埋蔵文化財調査報告書第６集）

養老町教育委員会2014『日吉遺跡発掘調査報告書』（第１～３次発掘調査の成果　養老町埋蔵文化財調査報告書第７集）

養老町文化財保護協会1974『養老町の文化財』（養老町の埋蔵文化財包蔵地）

なお、表２の遺跡名、種別、時代と、図５の遺跡位置、範囲は、岐阜県教育委員会2007『改訂版　岐阜県遺跡地図』を基に、遺跡の種類、時代等に関する新たな成果を踏まえて作成した。

表２　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代
1	栗原九十九坊跡	寺社跡	古代・中世
2	薬師堂遺跡	散布地	中世
3	薬師堂跡	寺社跡	古代・中世・近世
4	杉ノ本古墳群	古墳	古墳
5	宮代廃寺跡	寺社跡	古代
6	観音堂跡	寺社跡	近世
7	千手堂跡	寺社跡	近世
8	南宮山頂経塚群	その他の遺跡	中世
9	南森下遺跡	散布地	縄文
10	平古墳群	古墳	古墳
11	茶臼山古墳群	古墳	古墳
12	小黒見遺跡	散布地	縄文
13	谷の舞古墳	古墳	古墳
14	毛利秀元陣跡	その他の遺跡	中世
15	南山古墳群	古墳	古墳
16	境野古墳群	古墳	古墳
17	境野古墳	古墳	古墳
18	境野遺跡	散布地	弥生・古墳・古代
19	大平古墳群	滅失	古墳
20	八幡神社古墳群	古墳	古墳
21	南山５号古墳	古墳	古墳
22	栗原古墳群	古墳	古墳
23	扇平古墳群	古墳	古墳
24	清御子古墳	古墳	古墳
25	表佐湊跡	その他の遺跡	中世・近世
26	室原遺跡	散布地	古墳・古代・中世
27	沢田遺跡	散布地	古墳・古代・中世
28	村ノ尾古墳群	古墳	古墳

番号	遺跡名	種別	時代
29	東山古墳群	古墳	古墳
30	東山１号古墳	古墳	古墳
31	東山２号古墳	古墳	古墳
32	東山３号古墳	古墳	古墳
33	東山４号古墳	古墳	古墳
34	栗原山中世墳墓群	その他の墓	中世
35	栗原城跡（長宗我部盛親陣跡）	城館跡	中世
36	栗棘庵跡	寺社跡	中世
37	清水寺跡	寺社跡	中世
38	栗原山麓遺跡	散布地	弥生・古墳
39	栗原天待遺跡	散布地	古墳・古代・中世
40	象鼻山古墳群	古墳	古墳
41	象鼻山63号古墳	古墳	古墳
42	象鼻山64号古墳	古墳	古墳
43	象鼻山65号古墳	古墳	古墳
44	象鼻山66号古墳	古墳	古墳
45	象鼻山67号古墳	古墳	古墳
46	象鼻山１号古墳	古墳	古墳
47	象鼻山68号古墳	古墳	古墳
48	象鼻山69号古墳	古墳	古墳
49	日吉西遺跡	散布地	古代・中世
50	宇田城跡	城館跡	中世
51	日吉遺跡	散布地	弥生～中世
52	坂尻古墳	古墳	古墳
53	竜泉寺廃寺跡	寺社跡	中世
54	竜泉寺古墳	古墳	古墳
55	大墳城跡	城館跡	中世
56	押越遺跡	散布地	中世

図５　周辺遺跡位置図

（平成30年国土地理院発行1:25,000電子地形図25,000『大垣』『養老』を基に作成）

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

基本層序は、平成29年に垂井町教育委員会が実施した試掘調査、県文化伝承課が実施した試掘・確認調査で確認された層序と発掘調査における結果を基に、以下のとおりⅠ層からⅢ層に設定した（図６）。発掘区の標高は北から南、西から東に向かって低くなっている。

Ⅰ層　表土　黒褐色の腐葉土、現代の砂防工事に伴う盛土及び暗褐色・黒褐色・黄褐色の斜面からの崩落土である。層厚は約0.05ｍ～0.35ｍである。腐葉土は発掘区全域で確認した。砂防工事に伴う盛土は発掘区上段で確認した。崩落土は、発掘区下段の西部で確認した。Ⅱ層が存在しない調査地点では、Ⅰ層基底面を遺構検出面とした。土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗等が出土した。

Ⅱ層　整地土　黄褐色の寺院建立に伴う整地土である。発掘区下段の西部で確認した。層厚は約0.05ｍ～0.15ｍである。Ⅱ層上面を遺構検出面とした。

Ⅲ層　基盤層　明黄褐色・黄灰色の土である。発掘区の全域で確認した。場所によっては、土のしまりが異なったり、角礫を少量含んだりするところがある。

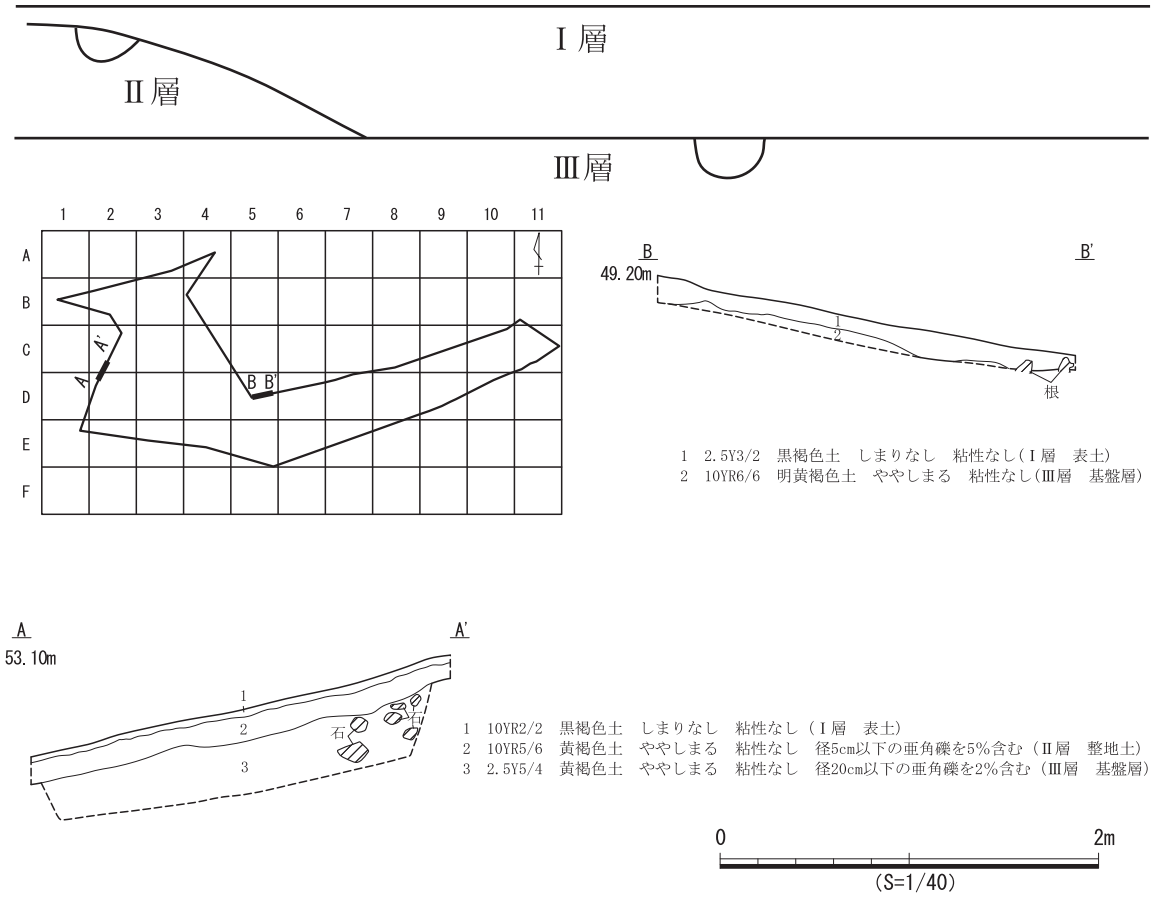


図６　基本層序

第２節　遺構・遺物の概要

１　遺構概要

（１）概要

今回の調査では、中世から近世の遺構を検出した。検出した遺構数は表３のとおりである。遺構の時期決定は出土遺物から判断したが、出土状況等を考慮し、時期不明とした遺構もある。また、出土遺物が複数の時期に跨る場合は、原則としてより新しい時期を選択したが、出土状況や出土量も判断材料とした。

本報告書では、遺物が出土したすべての遺構を報告する。

表３　遺構一覧表

遺構種別	ＳＤ	ＳＫ	合計
検出遺構数	1	86	87
掲載遺構数	1	11	12

（２）遺構の分類

今回の調査で確認した遺構はそれぞれ、形状と規模、構造から、溝状遺構、土坑に分類した。各遺構の分類基準は以下のとおりである。

溝状遺構（略号ＳＤ）地面を掘りくぼめた遺構のうち、細長い平面形となる遺構。

土坑（略号ＳＫ）地面を掘りくぼめた遺構の内、明確に性格付けができない遺構。

（３）遺構一覧表

各遺構の位置や規模などの情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

検出面　基本層序の層位名を使用し、表土（Ⅰ層）掘削後、Ⅱ層上面で検出した遺構は「Ⅱ上」とした。しかし、表土（Ⅰ層）の下にⅡ層が存在せず、Ⅲ層の基盤層上で遺構を検出した場合は、その上に堆積した土層の基底面の遺構とし、「Ⅰ基」と表記した。

平面形　以下のとおり、形状をアルファベットで表記した。

Ａ－円形　Ｂ－不整円形　Ｃ－不定形　Ｄ－不明とした。発掘区外に続く、あるいは他の遺構に削平されて、形状が明確でないものについては不明とした。

遺構埋土　以下のとおり、堆積状況をアルファベットで表記し、分層した層位数を数字で表記した。

Ａ－埋土が単一層　Ｂ－ほぼ水平な堆積　Ｃ－中央がＵ字状に凹むような堆積

Ｄ－凹みが片寄った堆積　Ｅ－その他

断面形　以下のとおり、形状をアルファベットで表記した。

Ａ－半円形　Ｂ－方形　Ｃ－逆台形　Ｄ－二段の掘り込み　Ｅ－その他

遺構の規模　単位はｍである。（　）で示したものは、残存長の計測値を示す。

出土遺物　以下のとおり、記号化して表記する。

Ｈ－土師器、Ｐ－須恵器、Ｋ－灰釉陶器、Ｙ－山茶碗、

Ｔ－山茶碗以外の中近世陶磁器、Ｒ－瓦、Ｓ－石製品、Ｉ－金属製品

２　遺物概要

（１）概要

今回の調査では、土師器、須恵器、灰釉陶器などの土器類と石製品、金属製品、瓦が出土した。遺構出土の遺物は少なく、大半が表土からの出土遺物である。それらの出土数は表４のとおりである。本報告書では、これらの遺物のうち、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物や、遺跡の性格を端的に示す遺物、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。以下、各遺物の概要を記す。

なお、遺物実測図の縮尺は３分の１（土器・陶磁器・石器）、３分の２（金属製品）とした。

表４　出土遺物一覧表（接合後破片数を示す）

種別	土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	中近世陶磁器	石製品	金属製品	瓦	合計
表土出土破片数	35	4	8	8	64	1	0	2	122
遺構出土破片数	19	0	0	5	6	0	4	0	34
割合（%）	34.62	2.56	5.13	8.33	44.88	0.64	2.56	1.28	100

土器類　今回の発掘調査では、中近世陶磁器、土師器が多く出土した。少量ではあるが須恵器や灰釉陶器も出土している。それらの大半は小片であり、器種や時期を判別できる遺物が少ない。土師器、須恵器、灰釉陶器の年代観や器種分類は既存の研究に従った[1)]。なお、須恵器は渡邉博人氏（元各務原市教育委員会）、中近世陶器は藤澤良祐氏（愛知学院大学）、近世陶磁器は岡本直久氏・金子健一氏（瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター）から指導を受けたが、本書における記載内容の責任は編集者にある。

石製品　砂岩製の砥石が１点出土した。

金属製品　銭貨が１点、鉄鏃が１点、不明製品２点が出土した。

その他　近世以降の瓦が２点出土した。

（２）遺物観察表

本報告書に掲載した遺物の観察表は、それぞれ種別ごとに作成し、掲載番号順に記載した。種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

出土位置　すべての出土位置を表記した。

出土層位　表土から出土した場合は、基本層序名（Ｉ）を表記した。また、遺構出土の場合、土層分層前は埋土を深さ約５㎝ごとに区切り、上層から順に「ａ，ｂ，ｃ・・・」の順に表記し、土層分層後はその土層番号（１，２，３・・・）を表記した。

大きさ　（　）は復元長を示す。

注

１）出土遺物の年代観や器種分類は、以下の文献を参考とした。
愛知県史編さん委員会2007『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』
各務原市教育委員会1984『美濃須恵古窯跡群資料調査報告書』
東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 1996『鍋と甕そのデザイン』（第４回東海考古学フォーラム）

第３節　遺構と遺物

１　溝状遺構

SD１（図７）

検出状況　Ｃ９～Ｃ11グリッド、Ｉ層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　幅0.84ｍ、深さ0.58ｍである。やや蛇行しながら東西方向に延びる。両端は発掘区外となるが、西端で北に屈曲し、発掘区外に延びる。Ａ－Ａ’断面では傾斜は急な立ち上がり、底面は平坦であるが、Ｂ－Ｂ’断面は浅い皿状で、底部は丸みを帯びる。底面標高は西側が高く、東側が低い。

埋土　Ａ－Ａ’断面は３層に分層したが、Ｂ－Ｂ’断面は単層である。Ａ－Ａ’断面はほぼ水平に堆積し、埋土全体に亜角礫を少量含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　３層から土師器１点、１層から金属製品１点が出土した。

遺物　１は鉄鏃である。明瞭な鎬は認められない。頸部は欠損する。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

２　土坑

SK４（図８）

検出状況　Ｂ２グリッド、Ｉ層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.61ｍ、短軸長0.42ｍ、深さ0.10ｍである。平面形状は楕円形である。壁面の傾斜はやや緩やかであり、底面はほぼ平坦である。

埋土　単層である。埋土中に炭化物と焼土ブロックが混じることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から中世陶器１点が出土した。

遺物　２は大窯第４段階後半の内禿皿である。

時期　出土遺物から、中世以降と考えられる。

SK６（図８）

検出状況　Ｂ２グリッド、Ｉ層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.90ｍ、短軸長0.38ｍ、深さ0.09ｍである。平面形状は楕円形である。壁面の傾斜は緩やかで、底面はやや丸みを帯びる。

埋土　単層である。埋土中に炭化物と焼土ブロックが混じることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から中世陶器１点が出土した。

遺物　実測可能な遺物は出土しなかった。

時期　出土遺物から、中世以降と考えられる。

SK12（図８）

検出状況　Ｂ３グリッド、Ｉ層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.75ｍ、短軸長0.74ｍ、深さ0.12ｍである。平面形状は不整円形である。壁面の傾斜はやや急であり、底面は平坦である。

埋土　単層である。埋土中に少量の炭化物、亜角礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　埋土中から山茶碗１点が出土した。

遺物　実測可能な遺物は出土しなかった。

時期　出土遺物から中世以降と考えられる。

SK16（図８）

検出状況　Ｂ３グリッド、Ｉ層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.98ｍ、短軸長0.64ｍ、深さ0.20ｍである。平面形状は楕円形である。壁面の傾斜は緩やかであり、底面は平坦である。

埋土　単層である。埋土中にブロック土を含むことから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況　埋土中から中世陶器１点、土師器１点が出土した。

遺物　３は古瀬戸後Ⅱ期又はⅢ期の折縁深皿若しくは卸目付大皿の体部である。

時期　出土遺物から、中世以降と考えられる。

SK19（図８）

検出状況　Ｃ２グリッド、Ⅱ層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.33ｍ、短軸長0.25ｍ、深さ0.16ｍである。平面形状は楕円形である。壁面の傾斜は緩やかであり、底面は平坦である。

埋土　単層である。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土師器１点が出土した。

遺物　実測可能な遺物は出土しなかった。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK27（図８）

検出状況　Ｄ３グリッド、Ⅱ層上面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.46ｍ、短軸長0.28ｍ、深さ0.22ｍである。平面形状は楕円形である。壁面の傾斜は西側では緩やかであるが、東側ではやや急である。底面は丸みを帯びる。

埋土　３層に分層した。ほぼ水平に堆積するが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　２層から土師器の小片１点が出土した。

遺物　実測可能な遺物は出土しなかった。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK31（図８）

検出状況　Ｃ４グリッド、Ｉ層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.48ｍ、短軸長0.43ｍ、深さ0.29ｍである。平面形状は円形である。壁面の傾斜は急である。

埋土　３層に分層した。ほぼ水平に堆積するが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　１層から山茶碗１点、３層から中世陶器１点が出土した。

遺物　４は古瀬戸後Ⅲ期の直縁大皿の口縁部である。

時期　出土遺物から、中世以降と考えられる。

SK32（図９）

検出状況　Ｃ４グリッド、Ｉ層基底面で検出した。遺構の東側は漸移的であり、輪郭はやや不明瞭であったが、西側ではやや明瞭であった。

規模・形状　長軸長2.07ｍ、短軸長1.06ｍ、深さ0.98ｍである。平面形状はやや不整の楕円形である。

壁面の傾斜はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

埋土　３層に分層した。水平に堆積し、埋土はしまりがあり、亜角礫や炭化物を少量含む。２層に基盤層のブロック土を含むことから人為的に埋められた可能性がある。

遺物出土状況　埋土中から、土師器13点、金属製品２点、中世陶器１点、山茶碗３点が散在して出土した。羽釜（５）は底面に近い東壁面に付着するように出土した。

遺物　５は尾張型羽釜Ａ２類である。６は古瀬戸の卸目皿若しくは縁釉小皿などの皿類の体部と考えられる。

時期　出土遺物から、中世以降と考えられる。

SK45（図９）

検出状況　Ｅ５グリッド、Ｉ層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.31ｍ、短軸長0.27ｍ、深さ0.15ｍである。平面形状はほぼ円形である。壁面の傾斜はやや緩やかであり、底面は丸みを帯びる。

埋土　単層である。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　埋土中から寛永通寶１枚が出土した。

遺物　７は新寛永である。

時期　出土遺物から、近世以降と考えられる。

SK72（図９）

検出状況　Ｅ８グリッド、Ｉ層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.39ｍ、短軸長0.34ｍ、深さ0.10ｍである。平面形状はほぼ円形である。壁面の傾斜は緩やかであり、底面は平坦である。

埋土　単層である。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　底面近くで土師器１点が出土した。

遺物　実測可能な遺物は出土しなかった。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK77（図９）

検出状況　Ｄ９グリッド、Ｉ層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長1.01ｍ、短軸長0.78ｍ、深さ0.16ｍである。平面形状は不整円形である。壁面の傾斜は西側が急で、東側はやや緩やかであり、底面は平坦である。

埋土　２層に分層した。埋土全体に亜角礫を少量含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　底面近くで近世陶器１点が出土した。

遺物　実測可能な遺物は出土しなかった。

時期　出土遺物から、近世以降と考えられる。

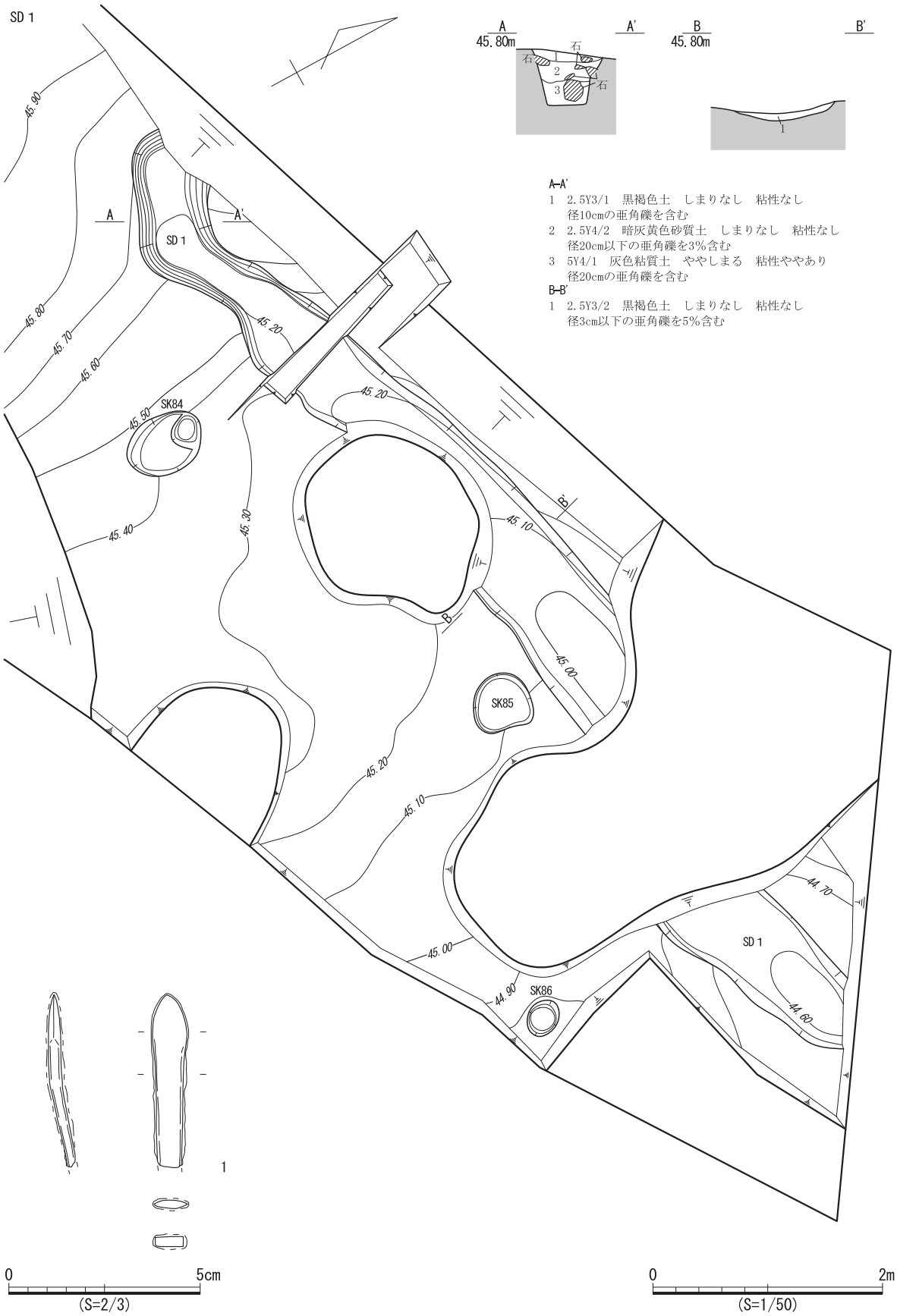
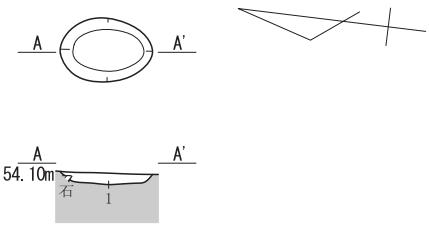


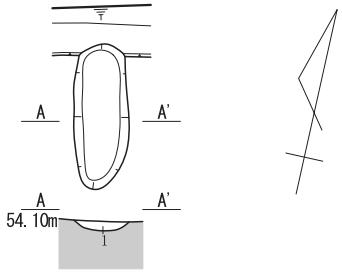
図７　SD１遺構図、出土遺物実測図

SK４



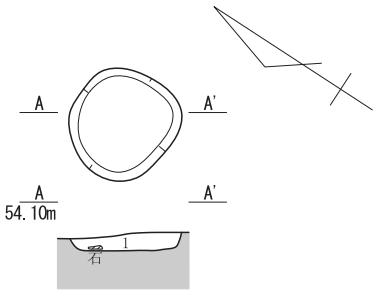
1　2.5Y4/3　オリーブ褐色土　ややしまる　粘性なし
　炭化物・焼土ブロックを少量含む

SK６



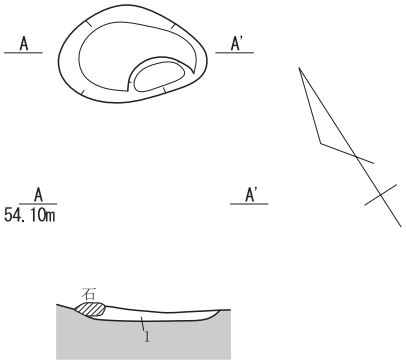
1　2.5Y4/2　暗灰黄色土　しまりあり　粘性なし
　炭化物・焼土ブロックを5%含む

SK12



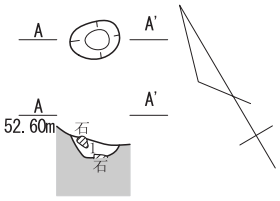
1　5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性なし　炭化物少量含む
　径10cm以下の亜角礫を1%含む

SK16



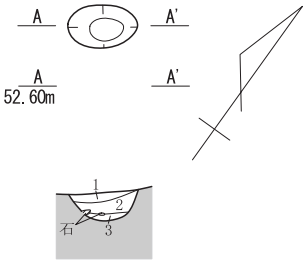
1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径20cm以下の亜角礫を1%含む
　2.5Y4/4　オリーブ褐色土ブロックを1%含む

SK19



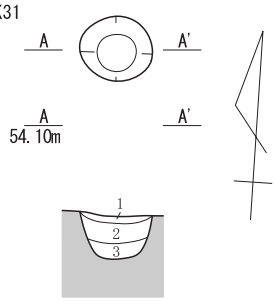
1　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性なし

SK27



1　2.5Y4/2　暗灰黄色土　ややしまる　粘性なし
2　2.5Y4/1　黄灰色土　ややしまる　粘性なし
3　10YR4/3　にぶい黄褐色土　ややしまる　粘性なし

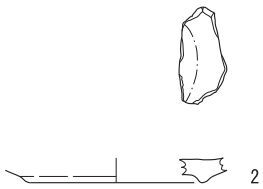
SK31



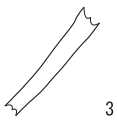
1　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりなし　粘性なし
2　2.5Y4/2　暗灰黄色土　しまりなし　粘性なし
3　2.5Y4/4　オリーブ褐色土　しまりなし　粘性なし

0　2m
(S=1/50)

SK４



SK16

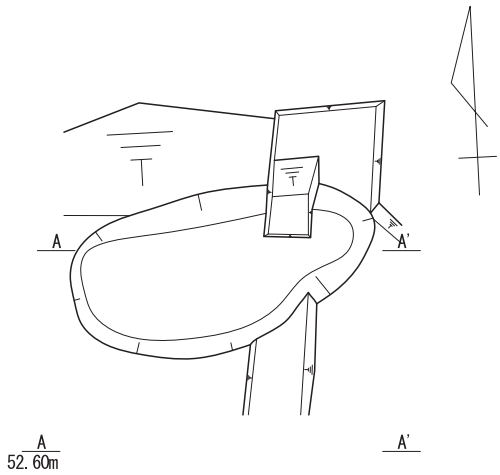


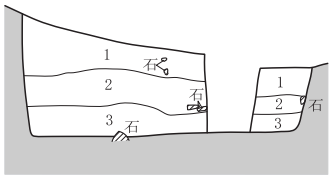
SK31

0　10cm
(S=1/3)

図８　SK４・６・12・16・19・27・31遺構図、SK４・16・31出土遺物実測図

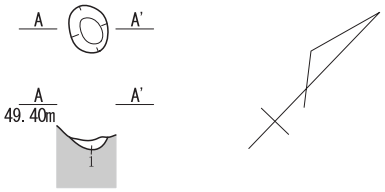
SK32





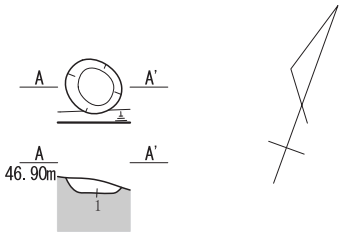
1　10YR3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径約5cmの亜角礫を1%含む
2　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土　ややしまる　粘性ややあり　炭化物を1%含む
　基盤層ブロック(10YR6/6)を3%含む　径5cm以下の亜角礫を3%含む
3　2.5Y4/1　黄灰色土　しまりあり　粘性なし　炭化物を1%含む
　径25cm以下の亜角礫を3%含む

SK45



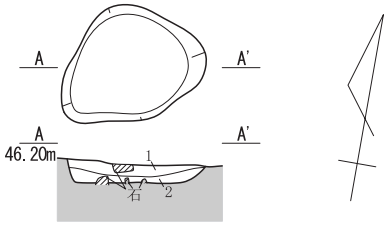
1　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性なし

SK72



1　2.5Y3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性なし

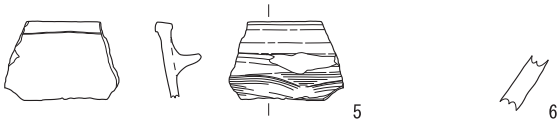
SK77



1　2.5Y3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性なし
　径15cm以下の亜角礫を1%含む
2　10YR4/6　褐色土　ややしまる　粘性なし
　径10cm以下の亜角礫を2%含む

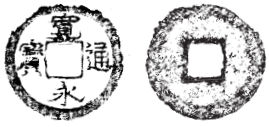
0　2m
(S=1/50)

SK32



0　10cm
(S=1/3)

SK45



0　5cm
(S=2/3)

図９　SK32・45・72・77遺構図、SK32・45出土遺物実測図

３　攪乱坑・表土出土遺物（図10）

比較的残存状態が良好な遺物を、16点図示した。

８は須恵器で、美濃須衛窯Ⅲ期の平瓶の頸部と考えられる。９～10は灰釉陶器で、９は丸石２号窯式の碗、10は丸石２号窯式の皿である。11～22は中近世陶磁器である。11は山茶碗類で、東濃型の大畑大洞４号窯式の皿である。12は古瀬戸前期美濃須恵窯の四耳壺、13は古瀬戸後Ⅲ期の縁釉小皿、14は古瀬戸後Ⅲ期～Ⅳ期古段階の筒型香炉、15は古瀬戸後Ⅳ期古段階の平碗である。16は大窯第２段階の天目茶碗である。17は登窯第１小期の鉄絵皿、18は登窯第１～５小期の片口、19は登窯第５小期の鉄絵鉢、20は登窯第６小期の丸碗、21は登窯第６～８小期の碗、22は登窯第10小期の瓶掛である。23は砂岩製の砥石である。側面のみ砥面が認められる。

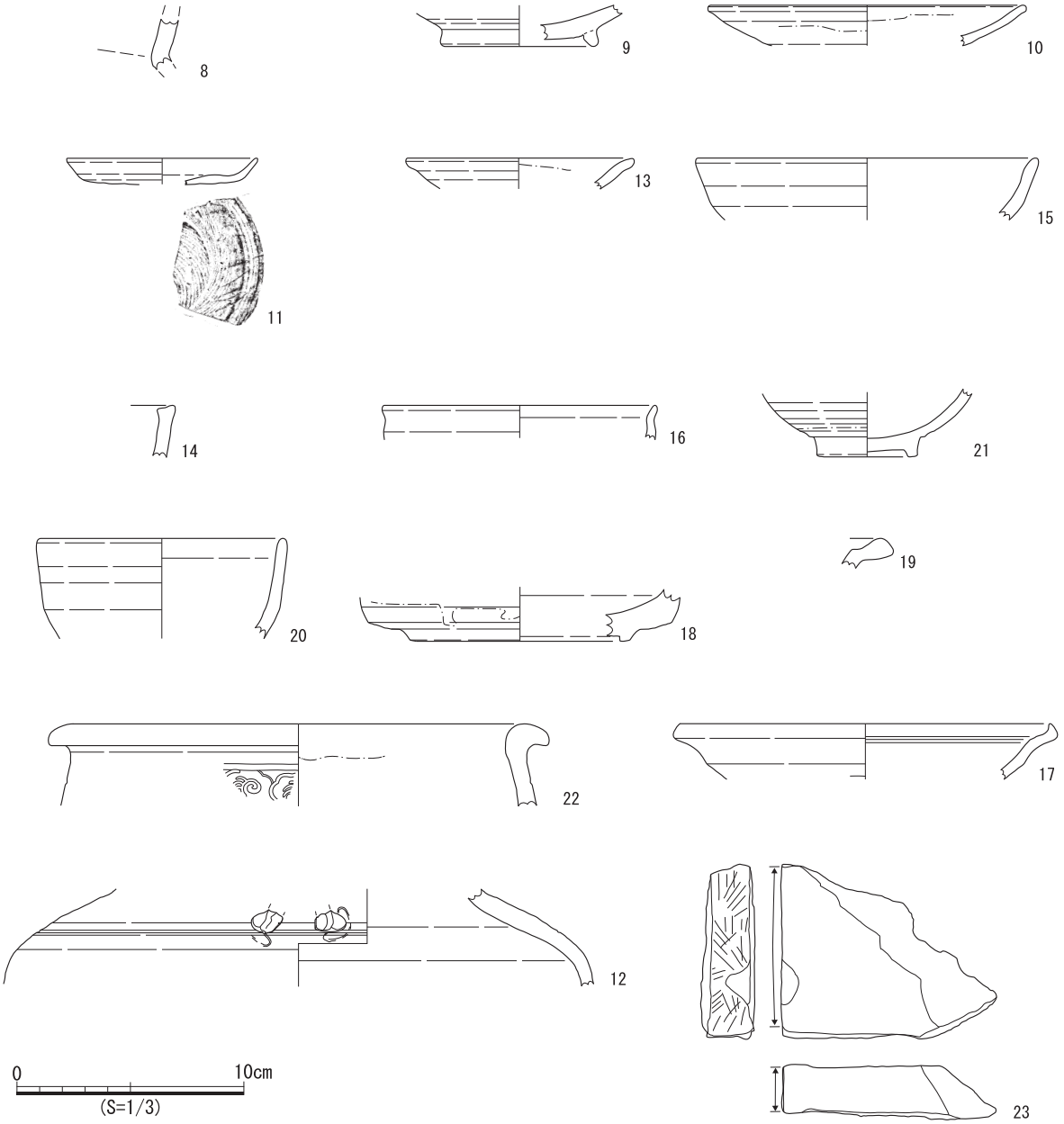


図10　攪乱坑及び表土出土遺物実測図

表５　溝状遺構一覧表

遺構番号	調査番号	地区割り	検出面	堆積状況	断面形状	規模（m）					重複関係		出土遺物	挿図	図版
						上端		下端		深さ	新	旧			
						長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SD1	S078	C9･10･11	Ⅰ基	C A	C A	(9.92)	0.84	(9.74)	0.68	0.58	－	－	H1・I1	7	3

表６　土坑一覧表（１）

遺構番号	調査番号	地区割り	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	規模（m）					重複関係		出土遺物	挿図	図版
							上端		下端		深さ	新	旧			
							長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SK1	S009	B1	Ⅰ基	A	A	D	(0.70)	(0.26)	(0.55)	(0.22)	0.07	－	－		－	－
SK2	S003	B2	Ⅰ基	A	A	A	0.34	0.3	0.26	0.23	0.06	－	－		－	－
SK3	S002	B2	Ⅰ基	A	D	A	0.28	0.25	0.14	0.08	0.07	－	－		－	－
SK4	S093	B2	Ⅰ基	A	C	B	0.61	0.42	0.46	0.27	0.10	－	－	T1	8	－
SK5	S092	B2	Ⅰ基	A	A	A	0.26	0.25	0.15	0.13	0.06	－	－		－	－
SK6	S090	B2	Ⅰ基	A	A	B	0.90	0.38	0.85	0.24	0.09	－	－	T1	8	－
SK7	S091	B2	Ⅰ基	A	C	B	0.56	0.27	0.45	0.17	0.05	－	－		－	－
SK8	S089	B2	Ⅰ基	C	C	B	0.55	0.28	0.29	0.15	0.15	－	－		－	－
SK9	S087	B2	Ⅰ基	A	D	B	0.75	0.39	0.36	0.29	0.12	－	－		－	－
SK10	S088	B2	Ⅰ基	A	C	B	0.72	0.35	0.30	0.13	0.13	－	－		－	－
SK11	S086	B3	Ⅰ基	A	E	B	0.70	0.23	0.60	0.10	0.17	－	－		－	－
SK12	S085	B3	Ⅰ基	A	C	B	0.75	0.74	0.63	0.63	0.12	－	－	Y1	8	－
SK13	S084	B3	Ⅰ基	B	C	B	0.66	0.52	0.50	0.32	0.16	－	－		－	－
SK14	S010	B3	Ⅰ基	A	A	A	0.31	0.30	0.20	0.19	0.08	－	－		－	－
SK15	S108	B3	Ⅰ基	A	C	B	0.78	0.52	0.65	0.38	0.17	－	－		－	－
SK16	S107	B3	Ⅰ基	A	C	B	0.98	0.64	0.77	0.45	0.20	－	－	T1・H1	8	－
SK17	S012	C2	Ⅱ上	A	D	A	0.35	0.30	0.19	0.16	0.11	－	－		－	－
SK18	S015	C2	Ⅱ上	A	A	A	0.19	0.17	0.11	0.10	0.10	－	－		－	－
SK19	S014	C2	Ⅱ上	A	C	B	0.33	0.25	0.15	0.12	0.16	－	－	H1	8	－
SK20	S099	C2	Ⅱ上	A	D	B	0.57	0.31	0.21	0.13	0.16	－	－		－	－
SK21	S020	C2･3	Ⅱ上	A	B	A	0.37	0.30	0.29	0.23	0.16	－	－		－	－
SK22	S013	C2･3	Ⅱ上	A	D	B	0.51	0.39	0.23	0.20	0.18	－	－		－	－
SK23	S019	C3	Ⅱ上	A	A	A	0.27	0.23	0.12	0.12	0.10	－	－		－	－
SK24	S016	D2	Ⅱ上	A	C	A	0.29	0.24	0.17	0.14	0.15	－	－		－	－
SK25	S018	D2	Ⅱ上	A	C	B	0.42	0.34	0.26	0.16	0.13	－	－		－	－
SK26	S100	D2･3	Ⅱ上	A	C	A	0.48	0.38	0.34	0.27	0.25	－	－		－	－
SK27	S021	D3	Ⅱ上	B	A	B	0.46	0.28	0.22	0.15	0.22	－	－	H1	8	－
SK28	S022	D3	Ⅱ上	D	C	A	0.32	0.30	0.14	0.15	0.30	－	－		－	－
SK29	S024	D3	Ⅱ上	E	C	B	0.59	0.49	0.45	0.35	0.25	－	－		－	－
SK30	S023	D3	Ⅱ上	C	A	A	0.40	0.36	0.24	0.23	0.31	－	－		－	－
SK31	S095	C4	Ⅰ基	C	C	A	0.48	0.43	0.25	0.24	0.29	－	－	Y1・T1	8	3
SK32	S027	C4	Ⅰ基	B	C	B	2.07	1.06	1.83	0.72	0.98	－	－	H13・Y3・T1・I2	9	3
SK33	S026	E4	Ⅰ基	C	C	A	0.29	0.28	0.21	0.20	0.18	－	－		－	－
SK34	S028	D5	Ⅰ基	A	C	A	0.26	0.20	0.18	0.12	0.21	－	－		－	－
SK35	S029	D5	Ⅰ基	A	C	B	0.26	0.17	0.18	0.13	0.14	－	－		－	－
SK36	S030	D5	Ⅰ基	A	A	B	0.55	0.36	0.41	0.26	0.28	－	－		－	－
SK37	S034	D5	Ⅰ基	C	E	B	0.27	0.13	0.19	0.06	0.22	－	－		－	－
SK38	S032	D5	Ⅰ基	A	E	B	0.55	0.15	0.43	0.13	0.14	－	－		－	－
SK39	S031	D5	Ⅰ基	A	A	A	0.30	0.28	0.19	0.14	0.12	－	－		－	－
SK40	S033	D5	Ⅰ基	A	C	A	0.46	0.35	0.37	0.25	0.15	－	－		－	－
SK41	S036	D5、E5	Ⅰ基	A	A	C	0.53	0.32	0.40	0.21	0.17	－	－		－	－
SK42	S038	E5	Ⅰ基	A	A	B	0.35	0.20	0.25	0.14	0.09	－	－		－	－
SK43	S037	E5	Ⅰ基	A	A	B	0.36	0.25	0.21	0.15	0.10	－	－		－	－
SK44	S040	E5	Ⅰ基	A	A	A	0.27	0.25	0.21	0.16	0.17	－	－		－	－
SK45	S039	E5	Ⅰ基	A	A	A	0.31	0.27	0.19	0.13	0.15	－	－	I1	9	3
SK46	S042	E4･5	Ⅰ基	A	A	B	0.72	0.48	0.61	0.32	0.18	－	－		－	－
SK47	S041	E5	Ⅰ基	A	E	B	0.84	0.55	0.68	0.38	0.22	－	－		－	－
SK48	S043	D5、E5･6	Ⅰ基	A	D	B	0.63	0.53	0.25	0.21	0.20	－	－		－	－
SK49	S045	E5･6	Ⅰ基	A	A	B	0.35	0.22	0.28	0.14	0.09	－	－		－	－
SK50	S044	D6	Ⅰ基	A	C	B	0.42	0.33	0.27	0.25	0.22	－	－		－	－

表７　土坑一覧表（２）

遺構番号	調査番号	地区割り	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	規模（m）					重複関係		出土遺物	挿図	図版
							上端		下端		深さ	新	旧			
							長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SK51	S060	D6	Ⅰ基	A	C	A	0.30	0.26	0.21	0.19	0.12	－	－		－	－
SK52	S046	E6	Ⅰ基	A	C	A	0.38	0.34	0.24	0.21	0.12	－	－		－	－
SK53	S047	E6	Ⅰ基	A	A	B	0.32	0.29	0.22	0.15	0.11	－	－		－	－
SK54	S058	D6･7	Ⅰ基	A	C	C	0.73	0.57	0.65	0.48	0.19	－	－		－	－
SK55	S059	D6･7	Ⅰ基	A	C	B	0.46	0.35	0.33	0.25	0.14	－	－		－	－
SK56	S048	E6･7	Ⅰ基	A	C	B	0.34	0.25	0.21	0.15	0.08	－	－		－	－
SK57	S057	D7	Ⅰ基	A	C	D	(0.51)	(0.26)	(0.38)	(0.20)	0.25	－	－		－	－
SK58	S056	D7	Ⅰ基	C	C	B	0.92	0.71	0.69	0.57	0.16	－	－		－	－
SK59	S055	D7、E7	Ⅰ基	A	C	A	0.48	0.43	0.40	0.29	0.24	－	－		－	－
SK60	S053	E7	Ⅰ基	A	C	A	0.49	0.45	0.34	0.32	0.19	－	－		－	－
SK61	S049	E7	Ⅰ基	A	C	A	0.33	0.25	0.12	0.09	0.11	－	－		－	－
SK62	S050	E7	Ⅰ基	A	C	A	0.30	0.28	0.20	0.17	0.12	－	－		－	－
SK63	S051	E7	Ⅰ基	A	C	B	0.47	0.31	0.35	0.22	0.19	－	－		－	－
SK64	S054	E7	Ⅰ基	A	C	A	0.45	0.42	0.31	0.28	0.23	－	－		－	－
SK65	S052	E7	Ⅰ基	A	C	A	0.55	0.55	0.49	0.43	0.19	－	－		－	－
SK66	S065	D8	Ⅰ基	A	C	B	0.33	0.25	0.25	0.15	0.10	－	－		－	－
SK67	S064	D8	Ⅰ基	B	C	A	0.39	0.36	0.28	0.26	0.10	－	－		－	－
SK68	S063	D8	Ⅰ基	C	A	B	0.35	0.29	0.20	0.18	0.10	－	－		－	－
SK69	S066	D8	Ⅰ基	A	E	B	0.90	0.45	0.38	0.31	0.14	－	－		－	－
SK70	S067	D8	Ⅰ基	A	E	A	0.50	0.40	0.25	0.06	0.15	－	－		－	－
SK71	S061	E8	Ⅰ基	A	C	B	0.41	0.31	0.27	0.20	0.07	－	－		－	－
SK72	S062	E8	Ⅰ基	A	C	A	0.39	0.34	0.24	0.22	0.10	－	－	H1	9	－
SK73	S077	C9	Ⅰ基	C	C	B	0.44	0.27	0.32	0.17	0.23	－	－		－	－
SK74	S076	C9	Ⅰ基	A	C	A	0.36	0.32	0.26	0.22	0.11	－	－		－	－
SK75	S075	C9、D9	Ⅰ基	A	C	A	0.38	0.33	0.31	0.23	0.15	－	－		－	－
SK76	S068	D8･9	Ⅰ基	A	A	B	0.43	0.29	0.32	0.19	0.13	－	－		－	－
SK77	S071	D9	Ⅰ基	C	C	C	1.01	0.78	0.82	0.66	0.16	－	－	T1	9	－
SK78	S094	D9	Ⅰ基	A	E	B	0.69	0.38	0.24	0.21	0.25	－	－		－	－
SK79	S070	D9	Ⅰ基	A	D	A	0.33	0.31	0.22	0.21	0.18	－	－		－	－
SK80	S069	D9	Ⅰ基	A	C	B	0.55	0.46	0.36	0.30	0.14	－	－		－	－
SK81	S072	D9	Ⅰ基	A	C	B	0.28	0.27	0.18	0.10	0.13	－	－		－	－
SK82	S074	D9	Ⅰ基	A	C	B	0.52	0.38	0.41	0.28	0.08	－	－		－	－
SK83	S073	D9	Ⅰ基	A	C	B	0.42	0.34	0.29	0.22	0.17	－	－		－	－
SK84	S079	C10	Ⅰ基	A	D	B	0.70	0.50	0.40	0.34	0.20	－	－		－	－
SK85	S080	C10	Ⅰ基	A	C	C	0.52	0.49	0.45	0.43	0.11	－	－		－	－
SK86	S081	C11	Ⅰ基	A	C	B	0.33	0.26	0.20	0.20	0.23	－	－		－	－

表８　土器類観察表

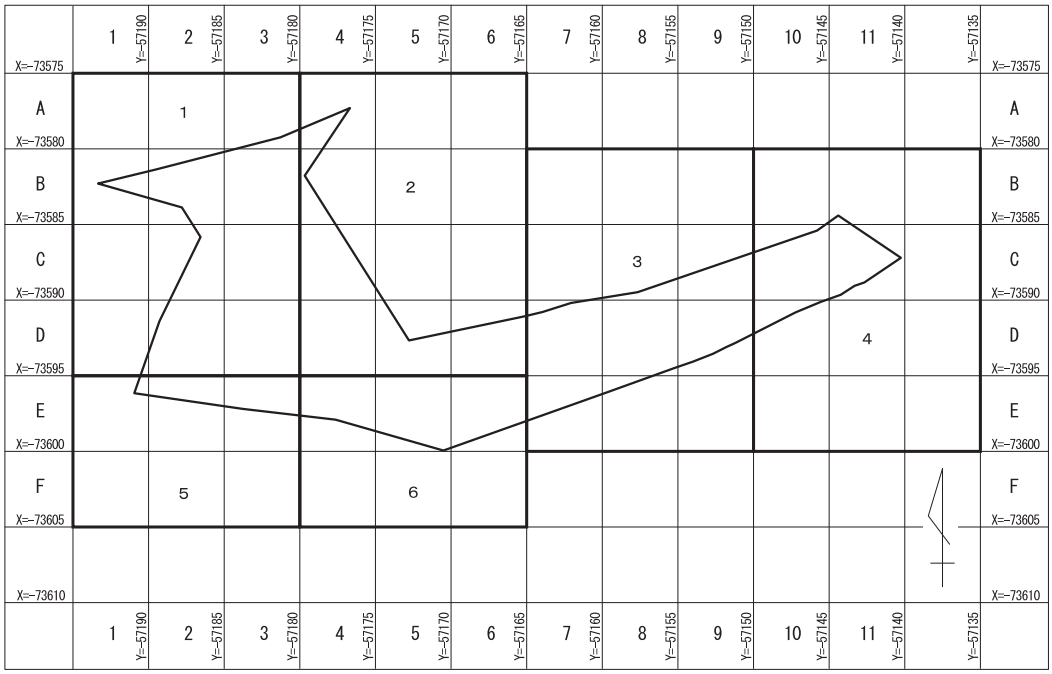
掲載番号	種類	器種	時期、分類名	出土位置		大きさ			備考	挿図番号	図版番号
				遺構名・グリッド	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
2	陶器（瀬戸・美濃）	内禿皿	大窯第4段階後半	SK4	1	—	(6.8)	(1.0)	内外面施釉(灰釉・淡黄5Y8/4) 見込み部分露胎	8	4
3	陶器（瀬戸・美濃）	折縁深皿か 卸目付大皿	古瀬戸 後Ⅱ～Ⅲ期	SK16	a	—	—	(4.3)	内面・外面上半施釉(灰釉・灰オリーブ5Y5/3)	8	4
4	陶器（瀬戸・美濃）	直縁大皿	古瀬戸後Ⅲ期	SK31	c	—	—	—	内外面施釉(灰釉・浅黄5Y7/4)	8	4
5	土師器	羽釜	A2類	SK32	3	—	—	(2.9)	内面ナデ/外面ハケ、鍔貼付	9	4
6	陶器（瀬戸・美濃）	卸目皿か 縁釉小皿	古瀬戸	SK32	a	—	—	—	内外面施釉(灰釉・オリーブ黄5Y6/4)	9	4
8	須恵器	平瓶か	美濃須衛窯Ⅲ期	攪乱	c-d	—	—	(2.2)	内外面ナデ	10	4
9	灰釉陶器	碗	丸石2号窯式	B3	Ⅰ	—	(6.6)	(1.8)	内外面回転ナデ/貼付高台 内面上方施釉(灰釉・灰白7.5Y8/1)	10	4
10	灰釉陶器	皿	丸石2号窯式	B2	Ⅰ	(13.6)	—	(1.8)	内外面口縁から体部上半施釉(灰釉・灰黄2.5Y7/2) 内外面上半施釉(灰釉・灰黄2.5Y7/2)・浸け掛け	10	4
11	山茶碗	皿	大畑大洞窯4号窯式	D9	Ⅰ	(8.4)	(7.0)	1.2	内面ナデ、体部外面ナデ・底部外面糸切痕	10	4
12	陶器（瀬戸・美濃）	四耳壺	古瀬戸前期	E5	Ⅰ	—	—	(4.3)	内面回転ナデ/外面施釉(灰釉・オリーブ5Y6/6) 沈線を巡らせたのち耳を貼付	10	4
13	陶器（瀬戸・美濃）	縁釉小皿	古瀬戸後Ⅲ期	D3	Ⅰ	(10.2)	—	(1.3)	内外面回転ナデ、内外面口縁付近・ 口縁端部施釉(灰釉・浅黄7.5Y7/3)	10	4
14	陶器（瀬戸・美濃）	筒形香炉	古瀬戸後Ⅲ期～ Ⅳ期古段階	B2	Ⅰ	(10.0)	—	(2.4)	内外面回転ナデ 内面上部・外面口縁端部施釉(灰釉・オリーブ5Y5/4)	10	4
15	陶器（瀬戸・美濃）	平碗	古瀬戸後Ⅳ期古段階	E6	Ⅰ	(15.2)	—	(2.4)	内外面施釉(灰釉・浅黄5Y7/4)	10	4
16	陶器（瀬戸・美濃）	天目茶碗	大窯第2段階	C4	Ⅰ	(12.0)	—	(1.5)	内外面施釉(鉄釉・暗褐10YR3/4)	10	4
17	陶器（瀬戸・美濃）	鉄絵皿	登窯第1小期	B3	Ⅰ	(17.0)	—	(2.5)	内外面施釉(灰釉・浅黄5Y7/4) 外面下端に露胎あり	10	4
18	陶器（瀬戸・美濃）	片口	登窯 第1～第5小期	D9	Ⅰ	—	(9.6)	(2.3)	内面ナデ/外面回転ケズリ、削出高台 外面施釉(錆釉・暗赤褐5YR3/3)	10	-
19	陶器（瀬戸・美濃）	鉄絵鉢	登窯第5小期	D9	Ⅰ	—	—	(1.3)	内外面施釉(灰釉・浅黄5Y7/3)	10	4
20	陶器（瀬戸・美濃）	碗	登窯第6小期	C4	Ⅰ	(10.8)	—	(4.4)	内外面施釉(長石釉・灰白5Y8/1)	10	4
21	陶器（瀬戸・美濃）	碗	登窯 第6～第8小期	D9	Ⅰ	—	(4.6)	(3.0)	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、削出高台 内面・外面上半施釉(飴釉・赤褐5YR4/6)/下半露胎	10	-
22	陶器（瀬戸・美濃）	瓶掛	登窯第10小期	D8	Ⅰ	(22.0)	—	(3.6)	内面下半露胎/回転ナデ 内面上半・外面施釉(鉛釉・鮮緑色)	10	4

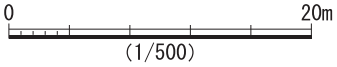
表９　金属製品観察表

掲載番号	器種	材質	出土位置		大きさ			備考	挿図番号	図版番号
			遺構名・グリッド	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
1	鉄鏃	鉄	SD1	1	3.65	0.95	0.45	両刃/鏑なし/無関/頸部断面長方形	7	4
7	銭貨	銅	SK45	1	2.28	2.28	0.09	新寛永	9	4

表10　石製品観察表

掲載番号	器種	石材	出土位置		大きさ			備考	挿図番号	図版番号
			遺構名・グリッド	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
23	砥石	砂岩	C4	Ⅰ	9.46	7.74	2.40	研面１面	10	-





＜図 12 ～ 17 の凡例＞

遺構上端線・中端線

遺構下端線

発掘区法面
トレンチ

攪乱

計曲線

主曲線

根

＜遺構名の表記＞　　赤色

図11　発掘区全域図割付図

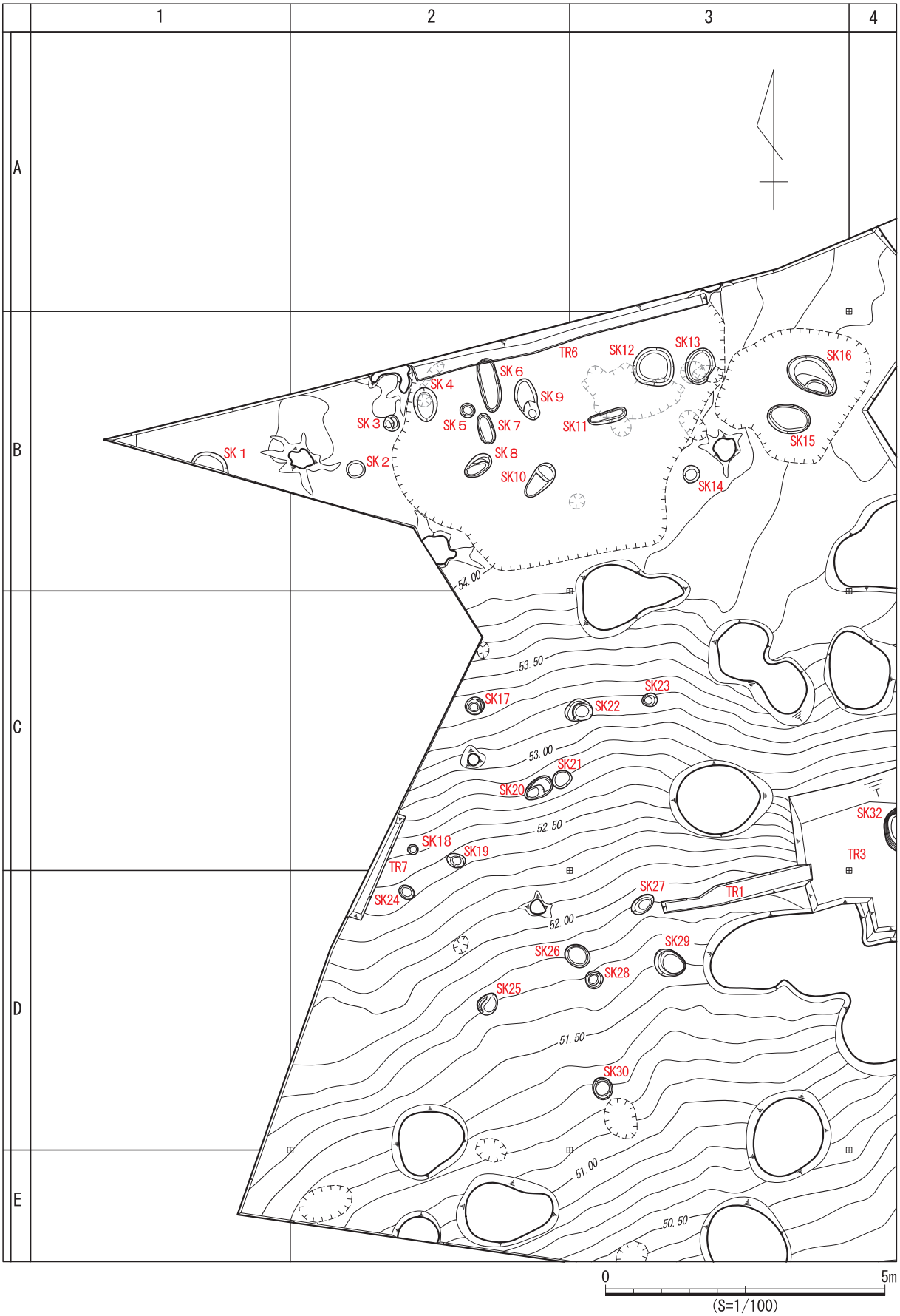


図12　発掘区全域図分割図（１）

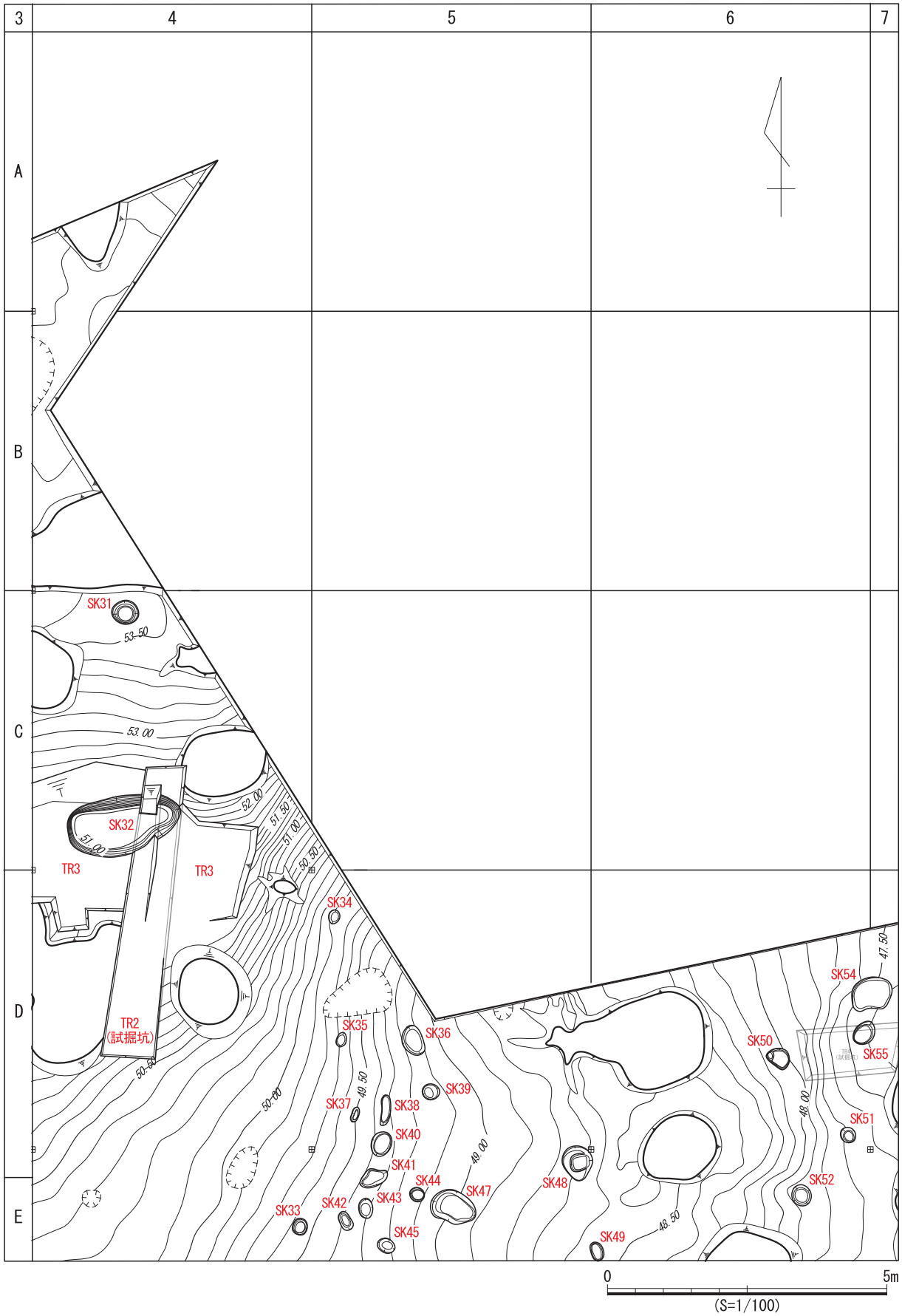


図13　発掘区全域図分割図（２）

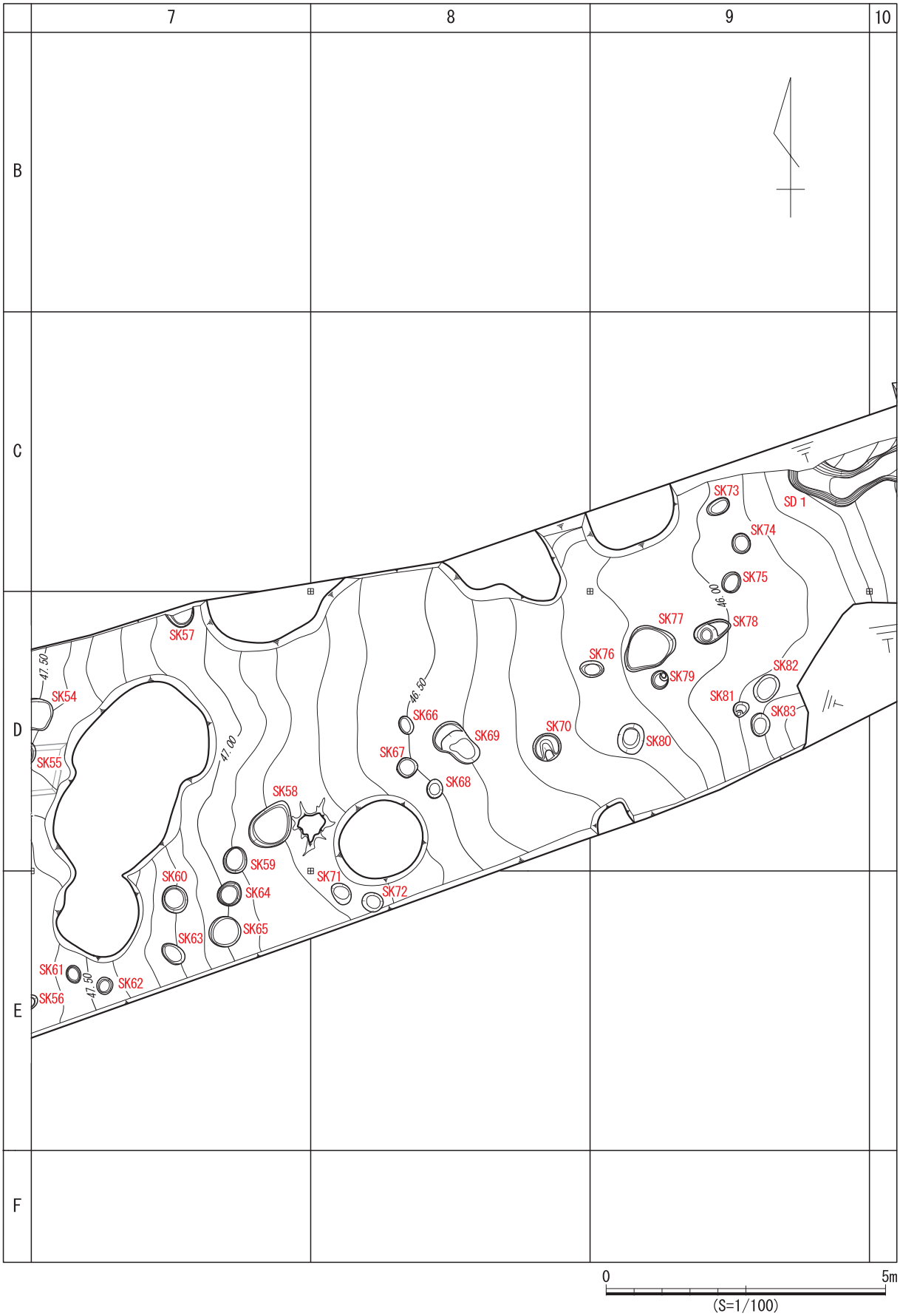


図14　発掘区全域図分割図（３）

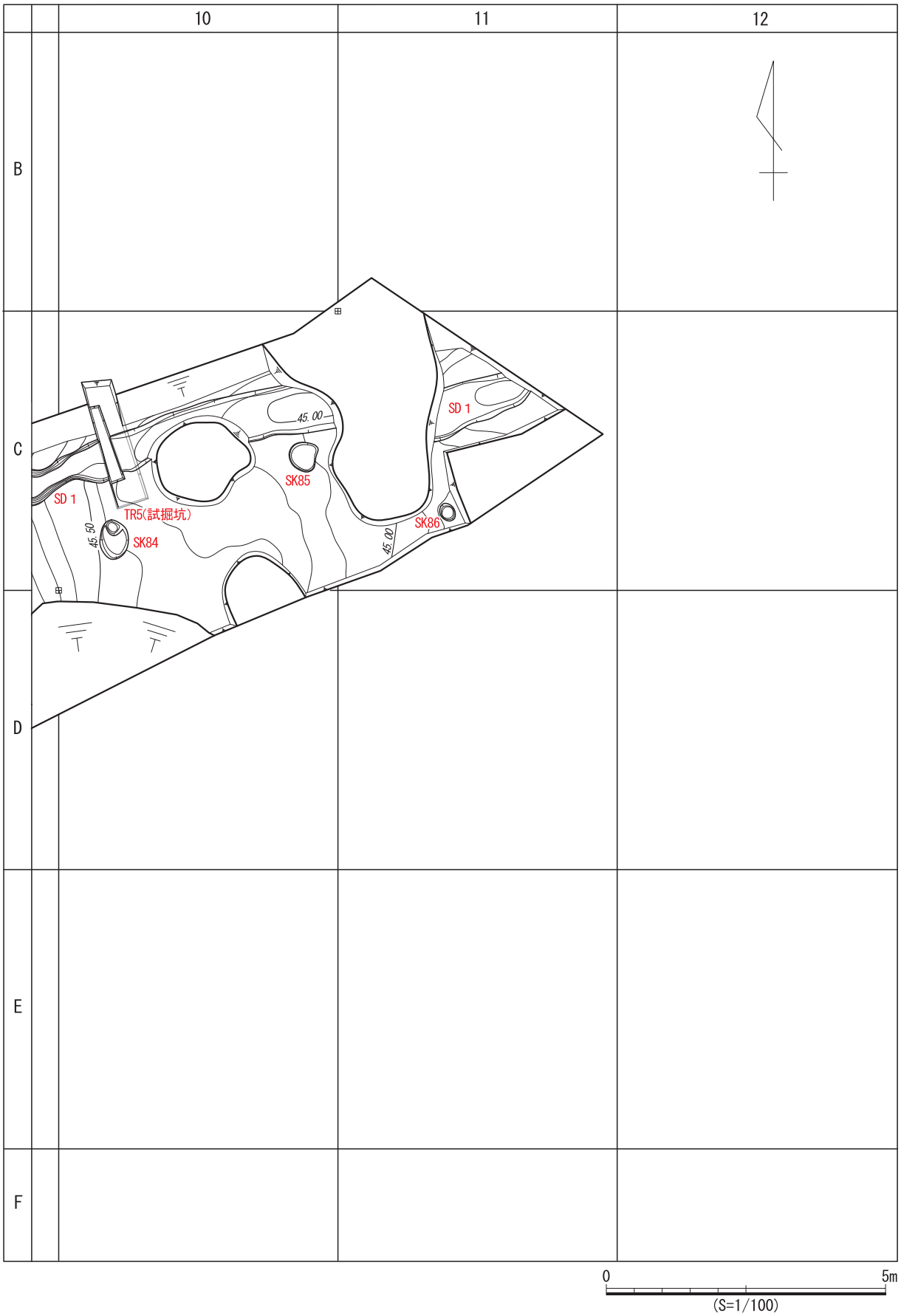


図15　発掘区全域図分割図（４）

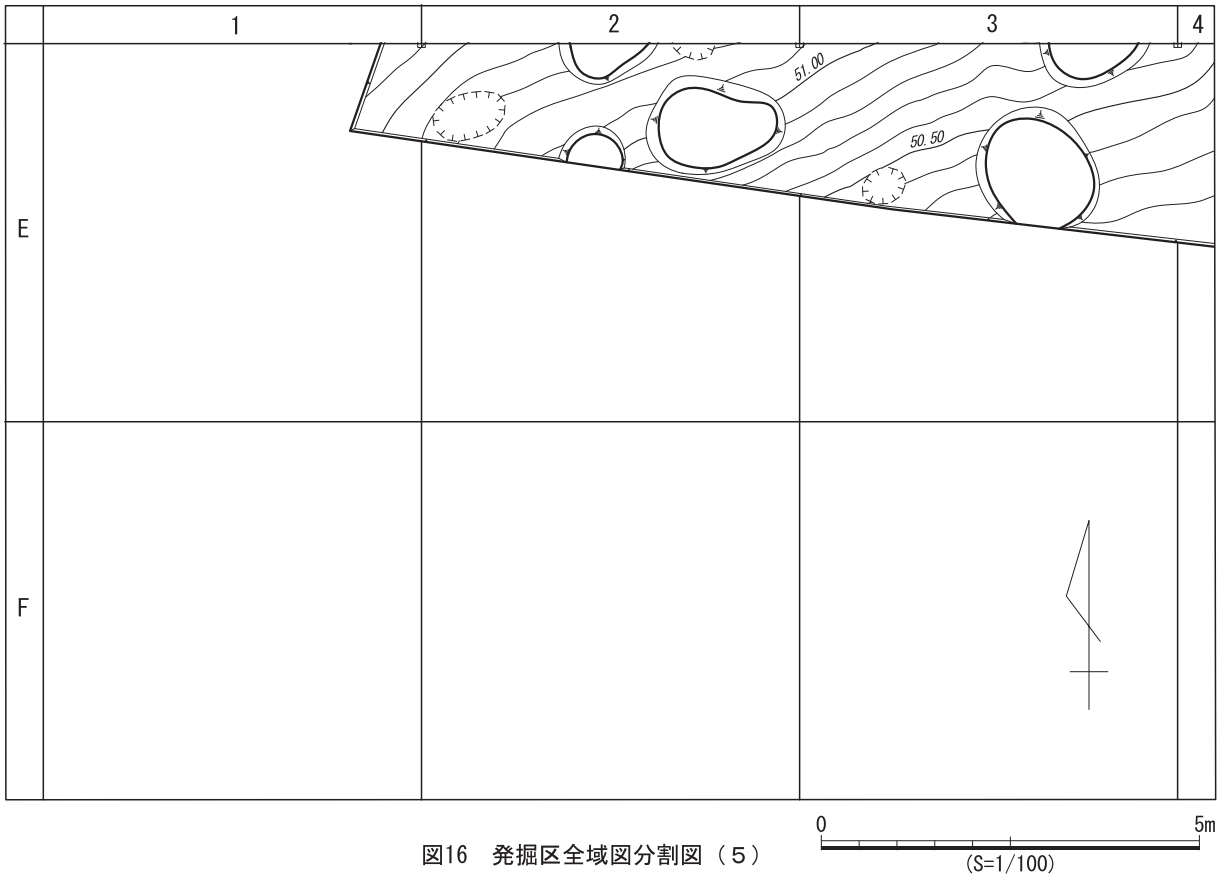


図16　発掘区全域図分割図（５）

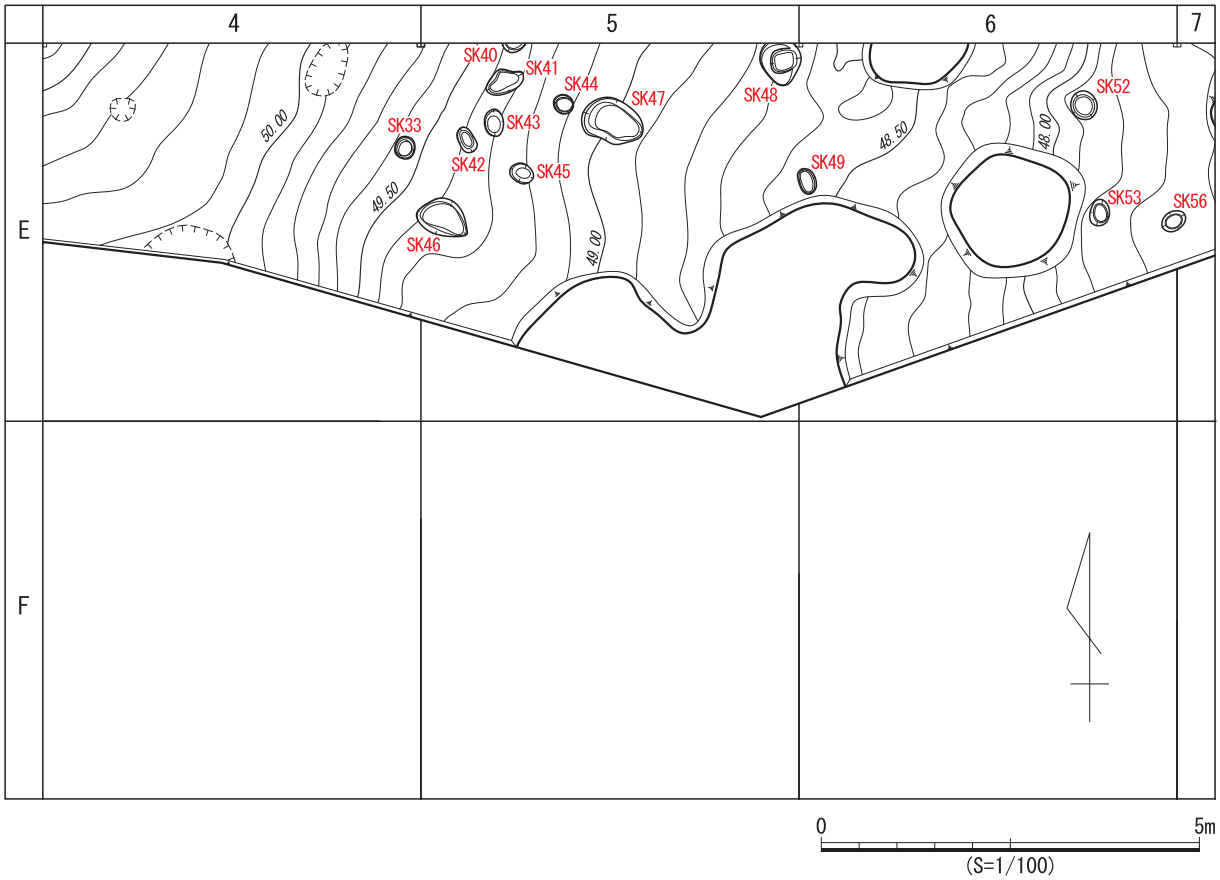


図17　発掘区全域図分割図（６）

第４章　総括

第１節　栗原九十九坊の沿革

栗原九十九坊に関する史料は、天文 14（1545）年に久保寺次郎兵衛源時久が書き残した文書の写し（以下「天文の文書」[1]という。）や愛知県知多市八代神社に残る清水寺の梵鐘銘などがあるが、沿革について不明な部分も多い。本節では、それらの史料に加え垂井町や養老町などが刊行した文献、先行研究をもとにして、栗原九十九坊の歴史を時代ごとに整理する。

古代

栗原九十九坊との関連が考えられる寺院として、多芸七坊の一寺である象鼻山別所寺があげられる。多芸七坊（養老寺・竜泉寺・光堂寺・柏尾寺・光明寺・別所寺・藤内寺）とは、聖武天皇が行幸された養老山麓の伊勢街道に沿って、天平宝字の頃に建立された寺院である。往古、現在の養老町付近が当芸野（多芸野）と呼ばれたことから、多芸七坊と呼ばれたと思われる。このうち、別所寺は九十九坊ともよばれ、奈良期において養老町橋爪（栗原九十九坊の南に隣接する地域）に建立された法相宗の寺院であったが、のちに天台宗となり、戦国時代の兵火で廃寺となった。文化年間の記録には、「多芸七坊中、象鼻山別所寺」と記されている[2]。別所寺が栗原九十九坊であったとすれば、奈良期に創建された可能性がある。一方、養老町飯積八幡神社の記録（以下、八幡神社記録）には、「不破郡栗原山に天台山正覚院末久保寺双寺とて九十九坊ありき」とあり、栗原九十九坊は久保寺双寺のことを指す可能性もある。久保寺双寺は、仏堂や僧房の並び立つ寺とも、久保寺と別所寺が並び建つ寺であったとも指摘される[3]。また、元禄期に書かれたと推定される古文書に、別所寺九十九坊は、橋爪村岡山別所に万仁寺、その北側に清水寺があり、この二寺を中心に仁王門や地蔵堂など多くの建物があったとの記述から、この二寺を久保寺双寺と称していたのではないかとの指摘もある[4]。

このように栗原九十九坊の創建は奈良時代まで遡る可能性があるが、栗原九十九坊に比定される寺院が判然とせず、また、栗原九十九坊の創建を明確に記載する文書は残されていないため、詳細は不明である。

中世

栗原九十九坊に比定される久保寺双寺については、「天文の文書」に、「天台山正覚院末美濃国不破郡栗原村久保寺双寺中百余坊争動を起す」とある。八幡神社の記録には、建仁２（1202）年、当時の将軍である源頼家は争いをおさめるため、黒田次郎真与[5]を「栗原村双寺中重役」として送ったとあることから、鎌倉時代初期に栗原山周辺には百余坊が存在していたようである。その４年後の建永元（1206）年に九十九坊の鎮守として、白山神社が創建された。白山神社棟札に、「不破郡別所村願主黒田氏、仰当社白山大権現者往昔天台山正覚院末濃州不破郡久保寺ノ鎮守也。」とある。この棟札によると、その後、建武２（1335）年、黒田三七郎源正常の時に足利・新田両氏の争いで寺院は焼失したといい、白山神社もその際焼失したが、「重役黒田三七郎源正常氏神与奉勧請此所安置者也」とあるため、現在栗原九十九跡にある白山神社は中世から現代まで存続していたと思われる。久保寺双寺の焼失後、復興ができないことを理由に、諸坊中には真宗に転じるものが出てきた。寺院録に「当

寺は栗原九十九坊の一寺にて」とある飯積光敬寺や橋爪念長寺などは、その一坊であったと思われる。表佐の宝光寺も栗原九十九坊の一坊であるといわれ、大永３（1523）年に移転し、真宗に転宗している。その後、天文 13（1545）年に栗原九十九坊の支配役であった黒田次郎兵衛時久が、焼かれた久保寺双寺の再建を室町幕府十三代将軍足利義輝に願い出た。しかし、光敬寺の由緒書きによると、願いが採用されなかったため、久保寺時久が光敬寺の僧であった飯積山了恵及び代官川瀬五佐正に久保寺所蔵の宝刀を譲渡し、その後八幡神社に奉献されたとある。また、発掘区に近接している清水寺については、地元で「リショウジ」と呼ばれる清水寺の前身寺院があったと伝わり、栗原村明細帳に寺名として残っている利法寺を指す可能性がある。『新選美濃志』に「栗原山の山麓には、昔多芸七坊とて、多くの伽藍ありて宗教盛なりし由にて、現在ここに残れる清水寺・・・栗原清水寺は多芸七坊のうちの一寺なる由」とある。現在、愛知県知多市の八社神社に清水寺の梵鐘が所蔵されており、八代神社の社記によると、この梵鐘は寛正３（1462）年、領主の一色兵部小輔により八社神社へ寄進されたとある。鐘の銘が宝治元（1247）年とあることから鎌倉時代には清水寺があったことが確認できる。その後、明応年間（1492～1501）、大道真源により清水寺が再興され、天台宗から臨済宗に転宗している。清水寺の境内に「道勝禅門文亀元（1501）年三月十四日」の銘のある五輪塔が昭和初めにあったとされる。

近世以降

万治３（1660）年、宝鑑が衰退していた清水寺の堂宇を再建した。天保９（1838）年の栗原村明細帳には、清水寺の名が出てくることから、昭和 48 年に焼失するまで近世から現代にかけて存続していた可能性がある。山頂近くの町史跡指定地には、明治の初めに多量の五輪塔や石仏が集積され、大正９年には「九十九坊跡紀念塔」の石碑が建てられた。これらの五輪塔や石仏は、栗原山の東山麓に広がっていた寺院跡にあったものと思われる[6]。石仏は室町時代中～後期のものと思われることから中世に寺院が焼かれた後も埋葬や信仰が盛んであったことが指摘される[7]。

注

１）「天文年間以前から九十九坊の管理者となっていた久保寺次郎兵衛時久が、天文十四年十一月二十八日に書いている。この文書は、江戸時代には栗原村庄屋中の筆頭格であった栗田右三郎の家に伝わってきた。その文書は、東京へ出た栗田家が第二次大戦中の空襲で焼失してしたという。今はその写が残っているだけ。」（垂井町1969『垂井町史』通史編）207頁

２）岐阜県地方改良協会養老郡支会1925『養老郡志』

３）安福彦七1976『栗原山九十九坊象鼻山別所寺の歴史を尋ねて』

４）ふるさと橋爪編集委員会2003『ふるさと橋爪』

５）「黒田氏は久保寺双寺の支配役となる。」（前掲注３文献）７頁

「建武２（1335）年黒田姓を久保寺と改めた。」（前掲注３文献）10頁

「別庄の久保田家　数軒の分家に別れているが、もとは昔久保寺であったが、明治の初め姓を許された時、全部久保田としたということである。」（前掲注３文献）10頁

６）「現在栗原山中には、仁王門跡と称する地や、僧房が営まれていたと思われる平地を相当数見ることができる。」（垂井町1996『新修垂井町史』通史編）195頁

７）前掲注３文献

８）各遺跡の記述は、以下の文献を参考とした。

岐阜県神社庁2017『岐阜県神社名鑑』

垂井町1996『新修垂井町史』（通史編）

垂井町教育委員会2017『垂井町遺跡詳細分布調査報告書(1)』

垂井町史編纂委員会1969『垂井町史』（通史編）

垂井町文化財保護協会1992『垂井の文化財』第16集

垂井町文化財保護協会1994『垂井の文化財』第18集

垂井町文化財保護協会2001『垂井の文化財』第25集

養老町1978『養老町史』（通史編上巻）

養老町教育委員会1984『のびゆく養老町』

養老町文化財保護協会1974『養老町の文化財』（養老町の埋蔵文化財包蔵地）

岡田啓1972『新撰美濃志』復刻版

西脇康2018『養老・上石津　神社の棟札・絵馬・古文書史料集』（養老・上石津地区神社文化財総合調査報告書）、岐阜県神社庁養老上石津支部

平塚正雄1932『美濃明細記』

村上喜代志1992『橋爪の歴史』

第２節　測量調査の成果からみた栗原九十九坊跡の構造

栗原九十九坊跡の遺跡範囲を中心に地形観察図の作成を行った。今回の図化範囲を地形や施設の性格をもとにして図18のように、３地区に分けた。

Ａ区は遺跡の西部にあたり、栗原山頂付近から山腹にかけての範囲である。施設としては、栗原城跡や栗原山中世墓群、石塔集積場所、栗棘庵跡がある。Ｂ区は遺跡の南東部にあたり、山腹から山麓にかけての範囲である。施設としては、白山神社、御嶽神社、丸山神社が存在する。Ｃ区は遺跡の北東部にあたり、地元の方から「リショウジ」跡と呼ばれる山腹の墓地周辺から清水寺跡と山麓の墓地にかけての範囲である。今回の発掘区は、Ｃ区南東部に位置する。

Ａ区（図19）

Ａ区には栗原城跡（長宗我部盛親陣跡）と栗原山中世墓群、石塔集積場所、栗棘庵跡が存在する。また、東西に走る主な参道が２本ある。南側の参道（Ａ①）は東部では途中で北に折れ、栗棘庵跡南西の平坦面（Ａ②）へとつながっていく。また、西にいくにつれ山腹付近の平坦面を通り、山頂付近にある石塔集積の平坦面（Ａ③）へとつながっていく。一方、北側の参道（Ａ④）はＡ③や栗原連理のサカキ、弘法大師石仏安置所のある平坦面（Ａ⑤）、その東側の複数の平坦面につながる。

栗原連理のサカキ、弘法大師石仏を安置する窟のあるＡ⑤は、栗原城跡（長宗我部盛親陣跡）とされ、遺跡範囲の中では最も広大な平坦面である。窟の入り口付近には、複数の石仏や五輪塔部材がある。平坦面には、中央北寄りに方形の基壇状の高まり、南に円形の塚状の高まり、東に土塁状の高まりが存在しているが、地元住民の話によると、多宝塔など寺院の中心となる施設がこの付近にあったという。この平坦面から四方に道がのびている。南側にのびる参道はＡ③へとつながり、西側は山頂付近へとのびているが途中で途切れている。また、東側にのびる参道は、東向きの山腹の三角形状の平坦面につながっている。その中の平坦面（Ａ⑥）には、中央に方形の一辺２ｍ弱の石組がある。その南の法面には石段が一部残っており、下の面へと続いている。Ａ⑥の東の平坦面（Ａ⑦）の下方の法面にも石段が一部残っており、途中で途切れてはいるが平坦面（Ａ⑧）へとつながっていたであろうと思われる。平坦面（Ａ⑨）には楕円状の高まりが２か所あり、その高まりに礫が集積している。これらのことからＡ⑤に関係する施設が前方（東側）に広がっていた可能性がある。

栗原山中世墓群はＡ⑤の西側にあたる。南北に走る参道（Ａ⑩）の両脇の有段の斜面に五輪塔や一石五輪塔、石仏、角礫が多数散在している。また、垂井町の分布調査では蔵骨器と思われる古瀬戸、常滑の甕が確認されており、山頂付近が墓域であったと思われる。

石塔集積場所は、栗原山中世墓群南側のコの字形の土塁区画（Ａ⑪・高さ１～２ｍ）の南東斜面に存在する。明治時代にこの場所に石仏、一石五輪塔、五輪塔、宝篋印塔部材が集積されており、栗原九十九坊紀念塔の石碑が建っている。石塔集積場所の前方には方形の比較的大規模な平坦面（Ａ③）となっており、その中には方形状の高まりもみられる。現在は休憩所として利用されている。また、Ａ③の南西の斜面には道が続いており、道の際には石積が残り、平坦面（Ａ⑫）へと続き、Ａ③の南東にもＡ⑬のような比較的規模が大きな安定した平坦面が複数存在することから、Ａ③周辺には寺院に関係する施設があった可能性がある。Ａ⑫の南側の斜面には所々に10㎝ほどの角礫が円状に集積されている（集石遺構）。Ａ③とＡ⑤を挟むように谷が東方へ続いている。かつてこの谷の東に年中水

の枯れることがない所に石組をした取水場が明治の末期頃までは残っていたが、現在は土砂に埋もれてしまったという[1]。また、この谷を蛇谷といい、「手洗い石」と呼ばれる石があったという[2]。このことからこの谷の谷頭が水場であったと思われる。Ａ③やＡ⑤は谷頭にあたり、水場が近いことや平坦面の規模が大きいことから中心的な施設があったと考えられる。

Ａ区の東方の尾根上には比較的規模の大きな平坦面が連続して存在し、尾根の先端の平坦面は、栗棘庵跡と推定されている。参道のＡ④沿いに平坦面への出入口が存在するが、現状では、栗棘庵跡と背後の平坦面をつなぐような道は確認できない。

Ｂ区（図20）

Ｂ区は、御嶽神社、丸山神社、瓦散乱場所、白山神社が存在する。Ｂ区の北西に御嶽神社が存在する。平坦面としては小規模であるが、その周囲には比較的規模の大きな平坦面が存在する。御嶽神社には石組や石垣が残り、円形の高まりが存在する。背後の平坦面（Ｂ①）には土塁状の高まりがあり、参道沿いに出入口がある。崩落によって途中で途切れているが、御嶽神社の北西方向からもこの平坦面につながる道が存在していたと思われる。御嶽神社は明治時代になってから御嶽本社より勧請された神社であることから、もともと寺院跡であった平坦面を利用して建てられた可能性がある。また、神社から山麓方向に向かって参道（Ｂ②）が伸び、その両側には複数の平坦面が存在しているが、下段の平坦面ほど耕作地や植林の痕跡がみられ、近年の開発の影響を受けている。

山麓中央には丸山神社（創建不詳）がある。祠が建つ場所は、円形の小規模な平坦面であるが、北側には土塁で区画された平坦面（Ｂ③）がある。祠の前方に石段が残り、石段から東へとほぼまっすぐにのびる参道が下段の平坦面（Ｂ④）につながっている。また、丸山神社の南側には北西にのびる参道（Ｂ⑤）があり、その両側には複数の平坦面が広がり、御嶽神社の南側の参道（Ｂ②）とつながっている。

南の尾根上の参道Ｂ⑥には、近世以降の瓦が散乱している場所がある。小規模な楕円形の平坦面であり、北西にも小規模な平坦面が隣接する。道と道をふさぐような場所（小規模な平坦面）であり、建物があったとは考えにくいことから、瓦の散乱場所は門若しくは祠のようなものがあった可能性も考えられる。この上方にある石塔集積場所の栗原九十九坊の紀年塔が大正時代に建てられたことや瓦が近世末以降のものであると考えられることから、瓦散乱場所は栗原九十九坊の近代の様子を表している可能性がある。

Ｂ区の南側には白山神社（第４章第１節参照）がある。その北西側はゆるやかな斜面となっており、参道（Ｂ⑦）の両側には複数の平坦面が存在し、五輪塔部材や石仏（Ｂ⑧）が散見されることから、寺域はこのあたりまで広がっていた可能性がある。

Ｃ区（図21・図22）

Ｃ区には清水寺跡を中心にして、北東の山麓に現代の墓地、西の山腹の近世の墓地と複数の平坦面が存在している。清水寺跡には池や鐘楼跡、東面に石垣、石段が残り、南側には清水寺跡へとつながる東西に走る参道（Ｃ①）がある。北側には南斜面に設けられた方形の石組（Ｃ②）があり、それに伴う石段が確認できる。建物が建っていたと推定される平坦面Ｃ③から北西にのびる参道が石段へとつながることや平坦面の規模から、鎮守となる神社があった可能性がある。清水寺跡の北に東西に走る幅１～２ｍの溝（Ｃ④）があり、水がその溝を通じて清水寺のため池に流れ込んでいる。溝の両脇

には護岸のための石組が一部確認できた。溝は西にいくほど崩落土の影響を受け流水は確認できない。石組が途切れる西側には幅１ｍの穴（Ｃ⑤）があり、現状では流水は確認できなかったが、この周辺が水場であると考えられる。また、鐘楼跡西側の池の水は、池の北側にある溝へと流れていく。流水は北側にいくにつれてなくなり、途中で溝が崩落によって途切れているが、本来は清水寺ため池の東西に走る溝へとつながり、ため池に流れ込んでいたと思われる。清水寺跡の北側には、山頂に向かって東西にのびる参道（Ｃ⑥）が存在する。山腹付近には、その参道より南北にのびる参道が複数あり、中には祠へと続く道がある。

西の山腹の平坦面（Ｃ⑦）には、方形の石組の上に建てられた江戸期の板碑が複数残っている。墓地であれば板碑は斜面に建てられてもよいが、比較的大きな平坦面に建てられていることを考えると、元は寺院に関する平坦面であった場所を後世に墓地にした可能性がある。墓地のさらに西側は、ゆるやかな斜面になっており、元禄期の板碑１基や加工された石が複数残ることからＣ区の西側は近世の墓域が広がっていたと思われる。清水寺が江戸期に再興されたことを考えると、清水寺が管理していた墓域であった可能性がある。また、墓域につながる東西の参道（Ｃ⑧）があり、参道の際には２段積みの石積が部分的に残っている。Ｃ⑦の東側（下段）には明瞭な平坦面が複数広がっており、中には、方形状の高まりも確認できる。それらの平坦面には各平坦面をつないでいたであろうと思われる出入口や部分的に石積が存在する。この場所は、地元住民の話によると「リショウジ」と呼ばれる寺があったと言い伝えにあり（時期不明）、竹の子を掘るたびに土器が出土したという。これらのことから、清水寺跡北側の複数の平坦面には、寺院に関係する施設があった可能性がある。

今回の発掘区は、西へと延びる参道Ｃ①が途切れる場所にあたり、南側は沢が流れている。発掘区の上段は平坦部であるが、下段は斜面となり、東にいくにつれて下がっている。発掘区の北側には「リショウジ」があったと考えられる平坦面が複数存在するため、発掘区上段の平坦部はそれに関わる施設が存在する可能性もあったが、今回の調査では確認できなかった。しかし、中世から近世の遺構を確認できたことや古代から近世の遺物を確認したこと、垂井町の分布調査で清水寺跡周辺から灰釉陶器が確認されていることから、発掘区周辺では古代から近世まで人々の生活が行われていた可能性がある。さらに、発掘区の東側には、参道沿いに土塁（Ｃ⑨）が東西に走っており、その土塁と沢にはさまれた場所に複数の平坦面が存在することから、これらの場所も寺院に関係する施設があった可能性がある。

全体を通じて

現況の測量によって、栗原山の山頂から山麓の広い部分に複数の平坦面や切通しなどを確認できた。このことから、栗原九十九坊跡が山頂部に集石墓による墓域をもち、山麓まで広がる大規模な寺院群であったことが想定される。栗原九十九坊が久保寺双寺という名の通り、並び建つ寺が２か寺あったと考えれば（第４章第１節参照）、谷を挟んで規模が大きな平坦面Ａ③と平坦面Ａ⑤のそれぞれに栗原九十九坊の中心となる寺院があったと思われる。この２か寺を上寺[3)]と考えると、参道によって結ばれる下寺が山麓に展開していたと考えられる。現在、Ｂ区とＣ区の間は沢によって分断されているが、地元住民の話によれば、かつて往来できる道が存在していたという。しかし、清水寺跡の北側にある東西にのびる参道Ｃ⑥は、西へと登っていくと沢があり、山頂付近の平坦面（連理のサカキ付近）に現状では通じていないため、Ｃ区とＡ区を結ぶ道は不明である。

今回の発掘調査で中世から近世の遺構を確認したこと、古代から近世にかけての遺物が出土していること、栗原山東山麓の広範囲に遺構が確認できることから、栗原山の東山麓には古代から近世にわたり大規模な寺院が展開していたと考えられる。

注

以下の文献を参考とした。

１）垂井町文化財保護協会1992『垂井の文化財』第16集

２）安福彦七1976『栗原山九十九坊象鼻山別所寺の歴史を尋ねて』

３）上原真人2007『皇太后の山寺山科安祥寺の創建と古代山林寺院』柳原出版

京都大学大学院文学研究科二十一世紀COEプログラム2004『安祥寺の研究１京都山科区所在の平安時代初期の山林寺院』

写真３　石塔集積場所

写真４　平坦面（Ａ③）

写真５　平坦面（Ａ⑤）

写真６　窟入口付近

写真７　平坦面（Ａ⑥）

写真８　平坦面（Ａ⑨）

写真９　栗原山中世墓群

写真 10　土塁区画（Ａ⑪）

写真 11　御嶽神社

写真 12　平坦面（Ｂ①）

写真 13　参道（Ｂ②）

写真 14　丸山神社

写真 15　瓦散乱場所

写真 16　五輪塔・石仏（Ｂ⑧）

写真 17　清水寺跡

写真 18　石組（Ｃ②）

写真 19　溝（Ｃ④）

写真 20　参道（Ｃ⑥）

写真 21　平坦面（Ｃ⑦）

写真 22　リショウジ跡

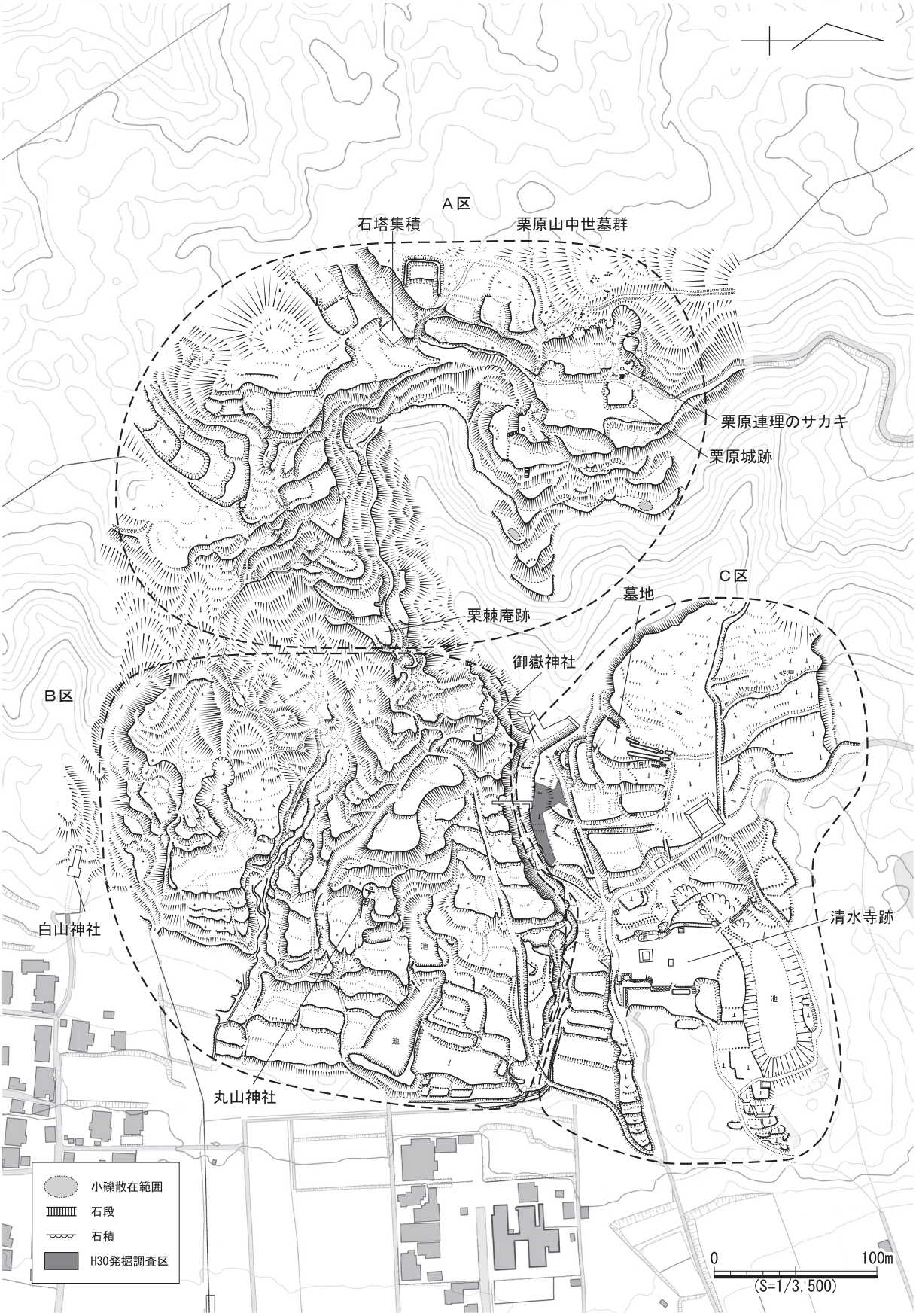


図18　栗原九十九坊跡　地形観察図（全体）

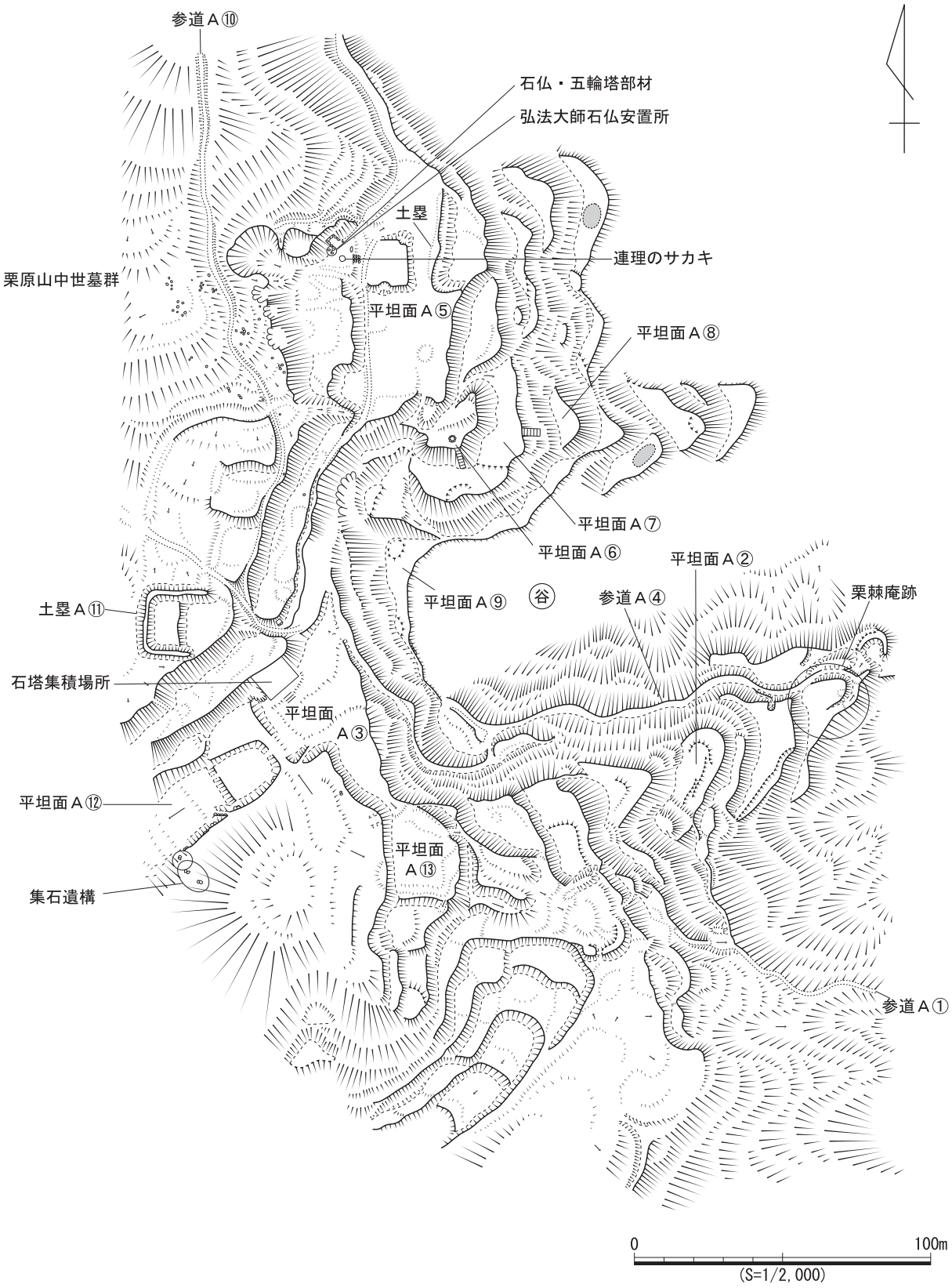


図19　栗原九十九坊跡　地形観察図（Ａ区）

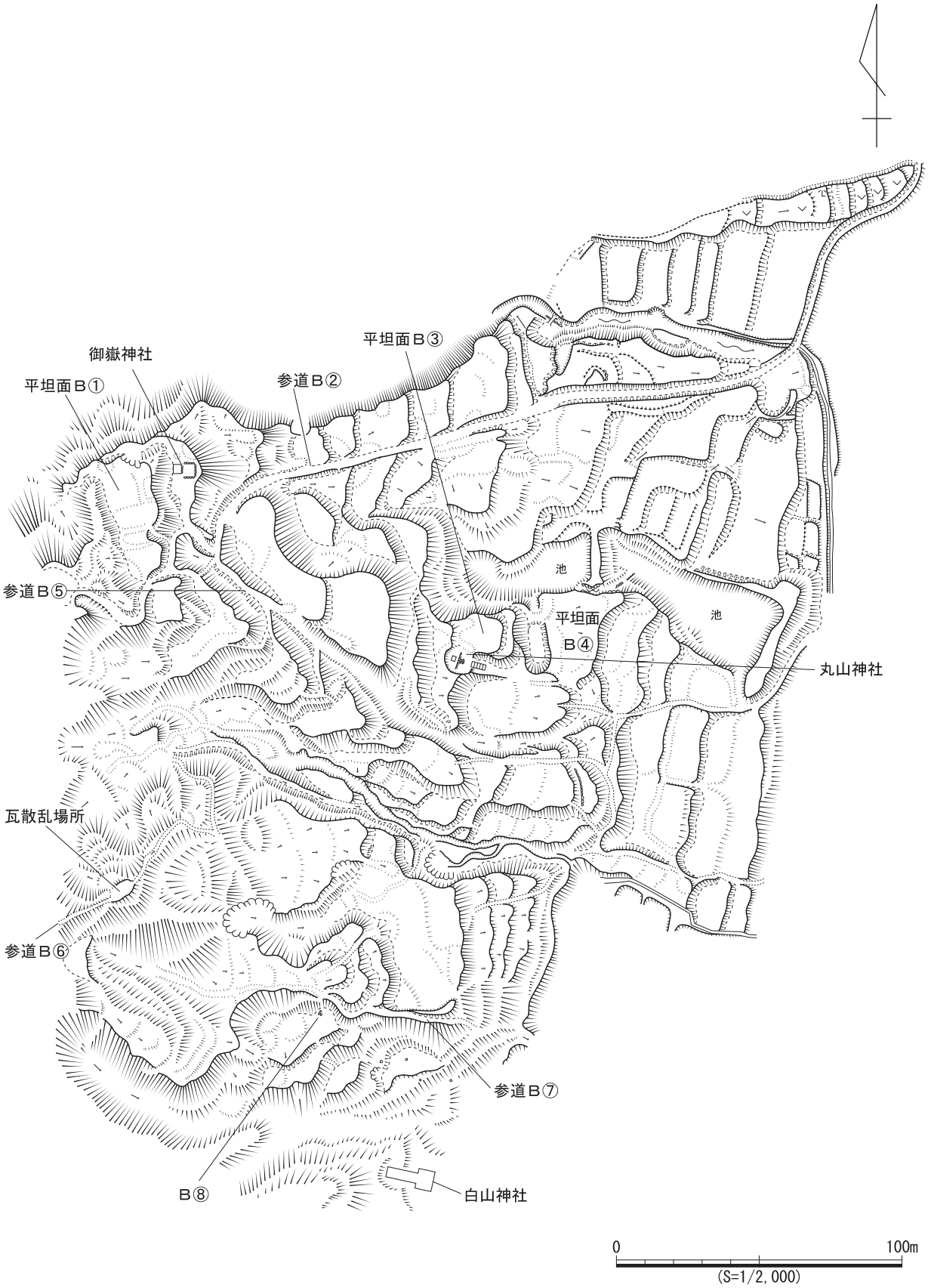


図20　栗原九十九坊跡　地形観察図（Ｂ区）

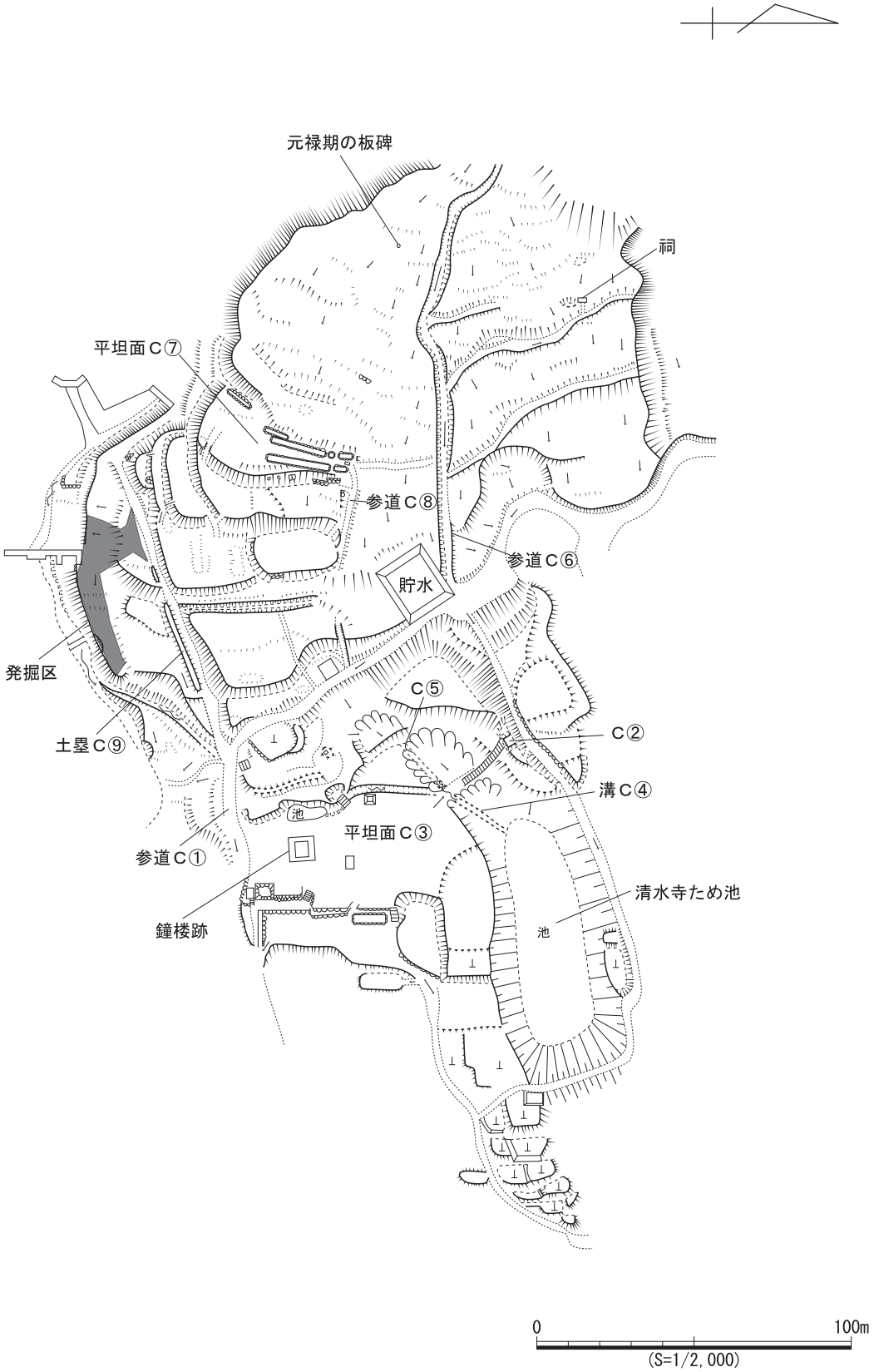


図21　栗原九十九坊跡　地形観察図（Ｃ区）

図22　発掘区周辺地形測量図

〈引用・参考文献〉

上原真人2007『皇太后の山寺山科安祥寺の創建と古代山林寺院』、柳原出版
岡田啓1972『新撰美濃志』復刻版
各務原市教育委員会1984『美濃須恵古窯跡群資料調査報告書』
岐阜県教育委員会1970『岐阜県指定文化財調査報告書』第13巻
岐阜県教育委員会2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』（第１集（西濃地区・本巣郡））
岐阜県教育委員会2007『改訂版　岐阜県遺跡地図』
岐阜県教育委員会・垂井町教育委員会1973『宮代廃寺跡発掘調査報告』
岐阜県神社庁2017『岐阜県神社名鑑』
岐阜県地方改良協会養老郡支会1925『養老郡志』
京都大学大学院文学研究科二十一世紀COEプログラム2004『安祥寺の研究１　京都山科区所在の平安時代初期の山林寺院』
佐藤和夫2014『垂井の文化財』第38集（回想　南宮大社経塚遺物の出土経過）、垂井町文化財保護協会
垂井町1996『新修垂井町史』（通史編）
垂井町教育委員会2017『垂井町遺跡詳細分布調査報告書(1)』
垂井町史編纂委員会1969『垂井町史』（通史編）
垂井町文化財保護協会1992『垂井の文化財』第16集
垂井町文化財保護協会1994『垂井の文化財』第18集
垂井町文化財保護協会2001『垂井の文化財』第25集
東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会1996『鍋と甕そのデザイン』（第４回東海考古学フォーラム）
西脇康2018『養老・上石津　神社の棟札・絵馬・古文書史料集』（養老・上石津地区神社文化財総合調査報告書）、岐阜県神社庁養老上石津支部
平塚正雄1932『美濃明細記』
藤澤良祐2007『愛知県史』（別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系）、愛知県史編さん委員会
ふるさと橋爪編集委員会2003『ふるさと橋爪』
村上喜代志1992『橋爪の歴史』
安福彦七1976『栗原山九十九坊象鼻山別所寺の歴史を尋ねて』
養老町1978『養老町史』（通史編上巻）
養老町教育委員会1984『のびゆく養老町』
養老町教育委員会2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』（養老町埋蔵文化財調査報告書第４集）
養老町教育委員会2010『象鼻山古墳群発掘調査報告書』（第１～４次発掘調査の成果　養老町埋蔵文化財調査報告書第６集）
養老町教育委員会2014『日吉遺跡発掘調査報告書』（第１～３次発掘調査の成果　養老町埋蔵文化財調査報告書第７集）
養老町文化財保護協会1974『養老町の文化財』（養老町の埋蔵文化財包蔵地）

発掘区上段（西から）

発掘区下段西部（西から）

図版２　発掘区近景（２）

発掘区下段中央部（東から）

発掘区下段東部（東から）

発掘区上段北壁（南東から）

発掘区下段北壁（南から）

SD１　完掘状況（西から）

SD１　完掘状況（東から）

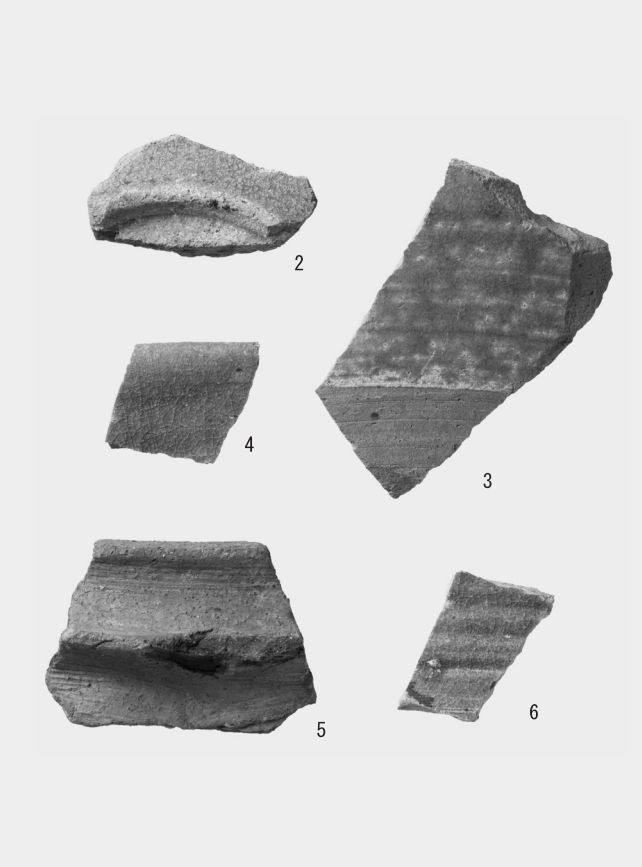
SK31　完掘状況（南から）

SK45　遺物出土状況（南から）

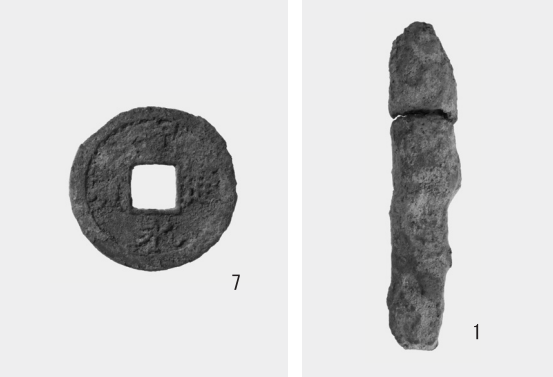
SK32　土層断面（南から）

SK32　完掘状況（南から）

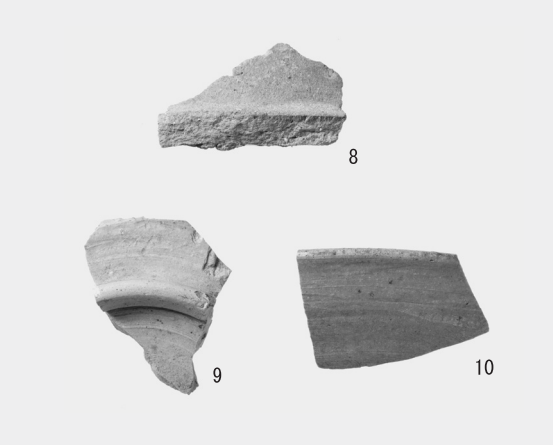
図版４　出土遺物



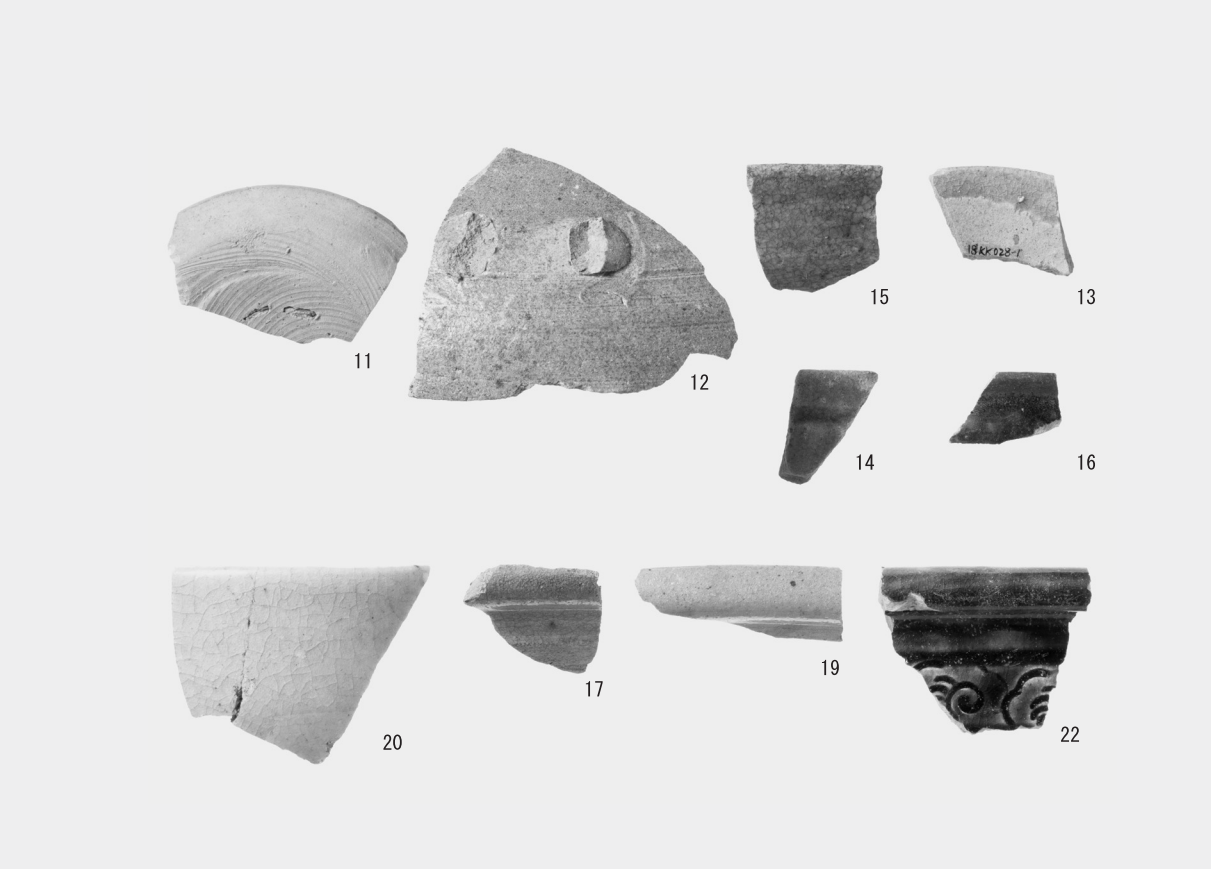
遺構出土土器



遺構出土金属製品



表土出土土器（１）



表土出土土器（２）

報　告　書　抄　録

ふりがな	くりはらくじゅうくぼうあと
書名	栗原九十九坊跡
副書名	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第147集
編著者名	加中雅章
編集機関	岐阜県文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜市三田洞東1-26-1　TEL058-237-8550
発行年月日	2020年３月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
栗原九十九坊跡 くりはらくじゅうくぼうあと	岐阜県 ぎふけん 不破郡 ふわぐん 垂井町大字 たるいちょうおおあざ 栗原中尾山 くりはらなかおやま	21361	2065	35° 20’ 06”	136° 32’ 16”	20180702 ～ 20180910	442	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
栗原九十九坊跡	社寺	古代 中世 近世	溝状遺構　１条 土坑　86基	土師器　54点 須恵器　４点 灰釉陶器　８点 中近世陶磁器　83点 石製品　１点 金属製品　４点 瓦　２点	中世から近世の遺構を確認した。古代から近世の遺物が出土した。

要約	栗原九十九坊跡は栗原山の山頂付近から山麓に立地する寺院跡である。今回の発掘区は、宝治元（1247）年以前に創建され昭和 48 年に焼失した清水寺跡に近接し、その前身寺院が所在する可能性がある平坦面に隣接する。発掘調査では中世から近世の遺構を確認した。出土遺物は中近世陶磁器類が大半を占めるが、少量ではあるものの灰釉陶器が出土している。また、地形観察の成果から栗原九十九坊跡は山頂付近に上寺が２か寺あり、下寺が山麓へと広がっていたと考えられる。これらのことから当該地では古代から近世にかけて大規模な寺院が展開していた可能性がある。

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第147集

栗原九十九坊跡

2020年３月19日

編集・発行　岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1
印　　刷　株式会社もとすいんさつ